

---

# 少年の異世界戦記 ~ゼロの使い魔編~

クロイツヴァルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年の異世界戦記　くゼロの使い魔編く

### 【Nコード】

N0842P

### 【作者名】

クロイツヴァルト

### 【あらすじ】

少年は数々の世界を渡り、自身の前に現れた鏡によりまた新たな世界へと介入するのである。

## プロローグ（前書き）

やってしまいました！！ゼロの使い魔編、主人公がサイトの代わりになって行ったらどうなるか？作者も思い付きの為、予測出来ません。

## ブローグ

俺は今、自身の目の前の背の小さいピンクブロンドの人物に対し困惑していた。

戒『（昨日は確か冥夜達とデッドレースを繰り広げて辛うじて生き残って部屋で寝た筈、何だか何故目の前にこのちびっ子ルイズがいる！？そもそも俺はいつ召還されていたんだ？寝た後の記憶が無い事から寝てる最中か。）……最悪だorz』

戒が落ち込んでいる中ルイズとおぼしき少女は近くにいるでかい杖を持った教師に話をしていたが戒は普通にスルーしていたがルイズが近づいて来て未だ座った状態の戒に視線をしゃがむ様にして合わした。

ルイズ『（よく見れば中々ね／＼）こ、光栄に思いなさいよ。／＼平民如きのアンタがき、貴族の私と契約出来るのだから。／＼  
「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブ・ランド・ラ・ヴァリエール。  
五つの力を司りしペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」』

ルイズは顔を少し紅潮させながらそう言いながら、使い魔の契約たる呪文を朗々と透き通る様な声で唱えてコントラクト・サーヴァント、所謂キスをしたのである。

ルイズ「コルベール先生、契約し終わりました／＼。」

そして、数秒が経ちルイズが顔を赤らめながらコルベールと呼ばれた黒いローブを着た中年の男性がルイズに話し掛けた。

コルベール「サモン・サーヴァントは何度も失敗してましたが、コントラクト・サーヴァントは無事成功したようですね？」

「そいつが平民だから契約出来たんだろ？」

「ゼロのルイズに幻獣種が契約出来るもんか!!」

「ゼロのルイズは平民の使い魔がちょうど良いんだろ？」

「あの方の瞳、とても綺麗ですわ／＼」

戒「ぐっ!？」

コルベールがルイズに嬉しそうに話し掛け、それに茶々を入れる生徒の会話を傍観していたら（一人は全く違うが、遠目から分かる物なのか不思議だが）急に左手の甲が焼かれる様な熱さに襲われ戒は思わず唸ってしまった。

ルイズ「じつとしてなさいよ？ただ、使い魔のルーンが刻まれるだけなんだから。」

戒『い…言われなくとも…わかつている（そうは言うがかなりキツ  
い物のだがな）』

そして漸くして身を焼くような熱さが引き手の甲にルーンが無事に  
刻み込まれていた。それに伴いコルベールが近付いて来た。

コルベール「ほう、珍しいルーンですな？少しスケッチさせて貰い  
ますね？」

コルベールはそう言うと言いつと懐からスケッチブック（明らかにローブ内  
に収まらざる）をペンと共に取り出すと戒の手の甲にあるルーンを見  
て写し始めた。

コルベール「さて、これで春の使い魔召喚の儀式は終了です。この  
後は教室に戻って通常の授業になりますので遅れない様にして下さ  
いね？」

コルベールはそう言いながらコモン・マジックのフライを唱え教室  
に向かい飛んでいった。それに倣うように他の生徒達もフライを唱  
えて飛ぶ中でルイズにちょっかいを出す者もいた。

「ゼロのルイズは歩いてくるんだね！」

「コモン・マジックすら唱えられない、ゼロのルイズは平民がお似

合いだね！！」

戒『これから、俺はどうなるんだ？』

そう言つて飛んでいく生徒達を見ながら俺とルイズは見ているしか無く、俺は他人事の様に考えていたのであった。

## プロローグ（後書き）

今回はルイズの部屋での会話です。その後は原作どりの流れに沿って行きたいと思います。また、M u v - L u v A l t e r n a t i v e 編の息抜き程度なので亀更新になりそうですのでご了承下さい。m ( \_ \_ ) m



## 第一話（前書き）

召喚された日の1日目が終了です。ゼロの使い魔を書き始めたクロイツヴァルトです。此方は気分転換で書いているので亀更新になると思われます。

## 第一話

今俺はあの後ルイズの部屋に連れられて来た。

ルイズ「で、あんたの名前は？」

戒『俺の名は黒逸戒、コチラの言い方だとカイ・クロイツになるな。』

ルイズ「ふ〜ん。変わった名前ね？」

ルイズの問いに戒は自分の名前を言ったら変わった名前と言い訝しむ様に見た。

戒「所で俺は使い魔になった訳だが何をすれば良いんだ？」

ルイズ「使い魔は主に目や耳となる能力が付き、主人が望む秘薬になる物やそれに準ずる物を探して来るのよ。」

戒『秘薬？エリクサーみたいな物か？』

ルイズ「何それ？」

戒『所謂、万能薬みたいな物だよ。俺の世界にある伝承にある物で、あらゆる病や呪いを瞬時に完治させる幻の秘薬とされる物。』

ルイズ「そんな物、水のスクウェアクラスのメイジでも作れないわよ！？」

戒『だから伝承だと言ったろ？架空や伝説の中に存在する物だからな。』

ルイズ「そう。で、使い魔にとってこれが一番重要な仕事で主人の楯や剣となり護らなければいけないのだけどアンタには無理でしょね。」

戒『まあ、そうなるかな？』

ルイズ「全く、どうしてアンタみたいな平民を使い魔にしちゃったのかしら。」

戒『俺は何故、違う世界から召喚されたのが不思議なのだが？』

ルイズ「さっきから違う世界って言ってるけど、どういう事？」

戒『ルイズのいる世界と俺のいる世界は確実に別世界と断言できる。』

ルイズ「どう違うの？」

戒『一番に挙がるのは世界が荒廃していない事。二番目には魔法が無く科学が発展していた事、最後にBETAが居ない事だ。』

ルイズ「魔法が無い世界ですって！？それに科学って何よ？BETAつてのも気になるけど……。」

戒『まあ、詳しい事は今度話すよ。今はもう夜遅い訳だから寝なきやだろ？』

ルイズ「…それもそうね。」

戒の言い方に若干不満を持ちながらも正論の為に文句を言わなかった。そして、いざ寝ようとしたらルイズから声を掛けられた。

ルイズ「ちよつと。着替えるから手伝いなさいよ！」

戒「君は男である俺に女性の着替えを手伝わせるのが趣味なのか？」

ルイズ「使い魔は召使いと同義なの。それに使い魔に見られてもどうって事無いわよ。」

戒「君がそう言うなら異論はないが。」

ルイズ「後、これを明日の朝に洗濯をして頂戴。」

ルイズはそう言って自分が着ていた服を戒に投げ寄越した。

戒「解ったよ。」

ルイズ「やけに素直ね？」

戒「仮にも住まわせて貰うのだから、拒否はしないよ。」

ルイズ「そう、あなたの寢床ならその藁の上だから。お休みなさい。」

戒「藁は要らないぞ？俺は座って寝るからな。」

ルイズ「眠り辛く無いの？」

戒「今までの生活で慣れているから此方の方が楽だよ。」

ルイズ「私には解らないわね。」

戒「ま、他人からは判らない物だよ？お休み。」

戒はそう言つて目を閉じると静かに寝息を立てていた。

ルイズ「本当に寝てる…クロイツつて言っただけどほんとに何者なのかしら？……考えてもしょうがないわね。」

ルイズは戒が寝てるのを確認し改めて黒逸戒と言う自分の使い魔について考えていたが今は考えても仕方ないとして自分も寝るのであった。

## 第一話（後書き）

次回は決闘まで持って行こうと思っています。

## 第二話（前書き）

初めからタバサやキュルケが絡んだ話になってしまいました。とり  
あえず次回はギーシュとの決闘直前までの話になります。

## 第二話

まだ太陽が顔を出す前の時間に戒はサモン・サーヴァントが行われた庭に来ていた。

戒『日課の鍛錬をするか。』

そう言つて、投影しておいた耶将・莫耶を使つて前の世界にいる闘士級を10体程を仮想敵として鍛錬をした。時に弾き、避けそして双剣の連撃で屠つていった。

戒『こんな物かな？…ん？彼処か。』

戒はあまり汗を流さずに鍛錬をしていたが途中で視線を感じて探すと学院の方からで魔術で視力を強化し詳しく探ると学院の塔に当たる部分から自分を見ている鮮やかな青色の髪をした少女が此方を見ていた。

戒『（タバサか？手でも振つてみるか？）』

戒が訝しく思いながらも手を振るがタバサは直ぐに引っ込んでしまった。

戒『何か不味かったか？…そろそろご主人様を起こさないとな。』

戒はそう言つて広場を後にした。そして時を少し遡り、タバサの部屋。

タバサ『……ん。』

タバサは何か不思議な感じがして眠たげな感じの蒼色の目を擦りながら目を覚ました。



タバサ「何…？」

タバサはベッドから起き上がり自分のベッドの近くにある自信の背丈以上の杖を持ち、窓際まで行き外の様子を伺ったがまだ陽が昇っておらず広場の様子は月明かりで少し見える位であつたが人が居るのが判った。

タバサ「よく…見えない。」

そう言つて私は杖を使いコモン・マジックで視力を強化し広場をもう一度見た。そこには昨日ヴァリエールが召喚した使い魔が見た事の無い双剣を使い踊っているかの様に動いていた。

タバサ「綺麗…。」

彼の見た事の無い双剣を使った洗練された動きに魅入っていた。

タバサ「何か探してる…？」

そして、その舞の様な物が終わり少しして彼が何かを探す様な動きをしたので不思議に見ていると不意に彼がこちらを見た事に私は驚愕した。

が、タバサは次の瞬間に再び驚愕するのであつた。

タバサ「！？（気付かれた！？）」

私は直ぐ様窓際から離れた。

タバサ「不思議な感じ…彼は何者？」

私は不思議な感覚を覚え自問自答していた。

タバサ「会えば少しは判る…？」

タバサはそう自己完結すると再びベッドに戻り眠るのであつた。

そして場面は再び戒に戻る。

戒『やはりと言うか、未だに寝ていたか…。』

戒が鍛錬を終えて部屋に戻るとルイズはベッドで幸せそうに寝ており、戒はそんなルイズを見て嘆息しつつ起こす為にルイズの身体を揺すって声をかける。

戒『おい。ルイズ？朝だぞー？』

ルイズ「うるさいわね／＼？って誰よアンタ？」

戒『（天然か？）昨日、君が召喚した使い魔だが？もしや、お忘れかな（笑）』

戒がそう言っているとルイズがベッドから身を起こし、驚色の瞳を眠たそうに擦りながら文句を言ったと思ったら自身が喚んだ使い魔の事をド忘れしていた。

ルイズ「う、うるさいわね／＼ただ間違えただけよ／＼／＼」

戒『そうか、なら良いが…それより早く着替えなくては朝食に間に合わないのではないのか？』

ルイズ「わ、わかってるわよ！？」

戒はルイズに着替えを渡しながら聞くと少し焦りながらも手早く着替えて下着類を俺に投げ寄越した。

ルイズ「後でそれも洗つといてよね？」

戒『わかった。とりあえず部屋を出ようか。』

ルイズ「ちょ、ちょっとは待ちなさいよー！」

ルイズの言葉に戒が肯定し部屋を出るがルイズが怒鳴りながら後を追った。

戒『そう朝からピリピリしても楽しくないぞ?』

ルイズ「誰の所為よ!!だれの!!」

戒とルイズが部屋を出て話していると隣の部屋のドアが開き出て来たのは燃える様な長髪に褐色の肌で見事なプロポーションをした女性と彼女の使い魔であろう尻尾に火を灯した火蜥蜴が出て来た。

???「あら?ゼロのルイズじゃない。こんな所で何をしてるのかしら」

ルイズ「ツエルプストー!?アンタには関係の無い事よ!!」

戒『だから、ルイズ朝から騒いではいけないと言ってるだろ。』

キュルケ「ふん、コレがアンタの使い魔ね?ゼロのルイズらしいんじゃない?私の名前はキュルケ、微熱のキュルケよ?」

戒『失礼をミス・キュルケ、私の名はカイ・クロイツと言います。それにしても見事な火蜥蜴だな。』

キュルケ「変わった名前ね?それにしても判ってるじゃない 私のフレイムは凄いわよ。なんたつて火竜山脈に生息しているサラマNDERよ?その道の人に見せたら相当な額を付けてくれるでしょうね」

ルイズ「アンタは自分の使い魔の自慢がしたい訳なの?それとも私を馬鹿にしたい訳!!」

戒『だからルイズ、話をするなら少しは声量を落としてからだな?』

キュルケ「…アンタの所の平民ってば何か変ね？」

ルイズ「何かじゃなくて、確実に変よ！！」

戒『本人の目の前でそれを言うかな？しかしルイズ？早く食堂に行かないとじゃないのか？』

ルイズとキュルケの口喧嘩？を仲裁しつつ戒ルイズの矛先が自分に回って来る前に食堂に移動する為に進言した。

ルイズ「そうよ！？ツエルプストーなんかの相手をしてる場合じゃないわよ！！さっさと行くわよ！！」

ルイズは怒鳴りながら食堂に向かって行った。

戒『（世話の掛かる奴だな）ではミス・キュルケまた後程。』  
そう言って戒はルイズを追って行った。

キュルケ「カイ…か。不思議な人よね、フレイム？」

キュルケが自身の使い魔に言ったがフレイムはキュルキュルと鳴くだけであつた。

そしてルイズを追ってアルヴィーズの食堂に着いた戒はその広さに驚愕していた。

戒『無駄に広いな？』

ルイズ「何を言ってるの？この位の広さじゃないとこの学院の生徒が全員入らないわよ？」

戒『そんな物か？』

ルイズ「そんな物よ。」

戒「ところで俺の食事は床に置いてあるアレか？」

ルイズ「当たり前でしょ？この食堂は貴族の者だけが入って良い所で使い魔で尚且つ平民のアンタが入れる場所じゃないのよ？私の計らいでこの食堂に入れて上げて、食事まであるのよ？感謝しなさいよ。」

そう言つてルイズは食事の席に着いた。全員が揃い原作でも言つていたブリミルと女王陛下への感謝をしてから食事を始める。

戒「（まっ、文句を言つても仕方ないな。）頂きます。」

しかし量が少ない料理の為に戒の食事はすぐに終わってしまった。

戒「なあ、ルイズ？」

ルイズ「なによ？」

戒「少し外に出て来るが良いか？」

ルイズ「まあ、授業の時にはちゃんと戻って来れば良いわ。」

戒「了解した。」

そして戒はヴェストリ広場に来ていた。そこには巨大な蛇やグリフオンに果てはバジリスクまでもがいた。

戒「幻獣や魔獣のオンパレードだな。ん？…アレは。」

そう言つて戒が嘆息している傍ら忙しなく動くメイドがいた。

戒「おゝい、ちよつと良いかな？」

「???」あつ、はい。貴族様、何でしょうか？」

戒「あゝ、スマンが俺は貴族では無くて使い魔なんだよ。」

「???」では、あなたがミス・ヴァリエールに召喚された御方な  
んですね!？」

戒「あ、ああ。そんなに俺は有名なのか?それと君の名前は?」

シエスタ「あつ!?!申し訳ありません!?!私はこのトリステイン学  
院でメイドをやっているシエスタと申します。」

戒「俺はルイズの使い魔をやっているカイ・クロイツだ。今は使い  
魔の餌やりつて所か?」

シエスタ「はい。多く食べる使い魔もいますから一度に大量の食事  
を運ぶ物で皆さん忙しく動いているのです。」

戒「なら、俺も手伝うぞ?」

シエスタ「そ、そんなミス・ヴァリエールの使い魔さんに私達の手  
伝いなどさせる訳には!?!」

戒「忙しく、大変なんだろう?それに俺も暇だからやらせてはくれな  
いか?」

シエスタ「...判りました。なら、食堂に使い魔用の食事がカートに  
用意してありますのでお願いします。」

戒が手伝うと言うとシエスタは貴族の使い魔にメイドのやる仕事はさせれないと言ったが戒が頑なにやらせてと言い、シエスタの方が折れて食事の運搬を頼む事にした。

戒『すいませ〜ん！！コック長はいますか〜？』

戒はアルヴィーズの厨房にて来ており、使い魔の食事を運ぶ為にコック長に聞くために入り口で声を上げた。

???「誰でい!？」

戒『シエスタに頼んで使い魔の食事運搬を手伝わせて貰いに来た。カイ・クロイツだ。』

マルトー「俺の名前はマルトーってんだ。それにしてもシエスタにか?あいつが人に頼むか?」

戒『そこは俺が暇を持て余してたから手伝わしてくれと言っただ。』

マルトー「そうか。なら、あそこにあるヤツを頼むぞ?」

マルトーがそう言っ指差した先には人が入れる程の大きさがある籠いっぱいを使い魔用の食事が入っていた。

戒『あれか?』

マルトー「おうよ!あれが貴族の使い魔に食わせる飯だ。」

戒『わかった。広場まで運んでシエスタ達に渡せば良いのか?』

マルトー「ああ、後の事はシエスタ達の方が要領がわかっているからな。」

戒『了解、任せてくれ。』

戒はそう言つて籠を片手で持ち上げて広場に向かった。そんな戒をマルトーは呆氣に取られていた。

マルトー「……人は見かけに選らねえな。」

戒『おい、シエスタ？こいつ何処に置くんのだ？』

シエスタ「あ、使い魔さん！！此方に置いて貰えますか？」

戒『了解。あつ！？そうだ、シエスタ？ちょっと聞きたいんだが良いか？』

ヴェストリ広場の中央辺りに置いて戒は何かを思い出したかの様にシエスタに聞いた。

シエスタ「どうしました？」

戒『衣服の洗濯場は何処にあるかな？』

シエスタ「それでしたら私が後で洗濯してお部屋まで運びますから良いですよ？」

戒『頼んでしまつて良いのか？』

シエスタ「はい。それがメイドである私達の仕事ですから。」

戒『ありがとう。実際、どうやれば良いか判らなかつたから助かるよ。今度お礼かもしくはシエスタが何か困つた事があつたら助ける



よ？」

シエスタ「そ、そんな！？お礼など貰えませんか！！」

戒「なに、困った時はお互い様って事でな？」

シエスタ「わかりました。では、何か困ったら使い魔さんにまた手伝って貰いますね？」

戒「ああ、俺はそろそろルイズの授業に付いて行くから退散するな。」

シエスタ「はい、お氣をつけて下さい。」

戒はシエスタと別れてルイズの行く教室に向かう途中でピンクブロードを揺らしながら此方に近づくルイズを見つけた。

戒「いま、も……」

ルイズ「何処に行ってたのよ！？探したじゃない！！」

戒「ルイズ？俺は確か食堂を出る前に広場に行く事を伝えた筈だが？」

ルイズ「そうだったかしら？」

戒「忘れたのか？」

ルイズ「忘れた訳じゃないわ！！ただアンタが忘れてないか確認しただけよ。さっさと行くわよ！！」

戒「まったく、私のご主人様は忙しいな。」

ルイズに急かされて戒は教室に入った。教室の中は教壇を下にして生徒が座る席は上に向かって階段上で講堂の様な外観になっていた。

ルイズ「アンタは使い魔なんだから席は無いわよ。」

戒『じゃあ、私は邪魔にならぬ様に壁際に移動しておくよ?』

ルイズ「あら、気が利くじゃない。そうしてくれると助かるわ。」

ルイズの言葉を聞き戒は上段に位置する窓の近くの壁を背もたれにして授業が始まるまで目を閉じて自分の使用可能な能力を確認していたが、誰かに服を引っ張られ意識を此方に戻し確認する為に目を開けて最初に飛び込んで来たのが青い髪に丸渕のメガネをかけた少女であった。

戒『どうかしたか?』

タバサ「…タバサ。」

戒『ああ、名前か?』

タバサ「ん…。」

戒『すまない、私はカイ・クロイツと言う名前だ。』

タバサ「そう…。」

戒『授業が始まる。席に着いた方がよろしいのでは無いか?』

タバサ「あなたも座る。」

戒『私は使い魔だから座る事は出来ないよ?』

タバサ「…座って。」

タバサが席に座る様に言ってきたが、それを戒は諭す様に断るがタバサは此方をその青い目で見つめて頑なに座る様に言ってきた。

戒『ですが、座る所はどうするんですか？』

タバサ「…隣。」

戒『よろしいので？』

タバサ「いい…。」

そしてタバサに言われるが儘に隣の席に着いた所で教室の扉が開き少しふくよかな女教師が入ってきた。

戒『誰だ？』

タバサ「シュブルーズ、トライアングルのメイジ。」

戒『なる程。』

タバサの紹介で戒は納得した。

シュブルーズ「皆さん、春の使い魔召喚の儀は大成功の様でしたね？私は新学期には様々な使い魔を見れる事がとても楽しみなのですよ。」

シュブルーズの言葉を聞き、戒はルイズを見ると案の定俯いていた。

戒『（やれやれ、あれは確実に気にしてるな。）』

戒の内心を知るはずもなくシュブルーズは話を続ける。

シュブルーズ『おやおや、変わった使い魔を召喚したようですね？  
ミス・ヴァリエール。』

その言葉に教室中に笑いが起こる。

「おい、ゼロのルイズ！！召喚出来なかったからって平民を連れてくるなよ！！」

ルイズ「違うわ！！ちゃんと使い魔は召喚したわよ！！ただ、アイツが出て来ただけよ！？」

「嘘つくなよ。＞サモン・サーヴァントくが出来なかったんだろ！！」

そう言つて教室中が更に笑いが起きる。

ルイズ『ミセス・シュブルーズ侮辱されました！！かぜっぴきのマリコルヌがわたしを侮辱しました！？』

そう言つてルイズは握り拳を作り机を叩いた。

マリコルヌ「誰がかぜっぴきだ！？風上のマリコルヌだ！風邪なんか引いてない！」

ルイズ「アンタの声はガラガラ声なんだからかぜっぴきがちょうどいいのよ！？」

マリコルヌと呼ばれた男子生徒は立ち上がりルイズを睨みつけた。  
そして、そんなルイズとマリコルヌを止める為にシュブルーズは自身の杖を使おうとした時に教室中をとてつもない殺気が覆う様にして放たれた。

タバサ、シュブルーズ、マリコルヌ「?!?!?!?!」

ルイズ「??」

その殺気に気づいたのは教師であるシュブルーズに殺気を向けられたマリコルヌ、そして戒の隣に座っていたタバサである。そんな重い空気の中で戒は怒気を孕みドスの効いた声で話すのであった。

戒「おい、小僧!!我が主人を侮辱するとは何事か!!私を侮辱するなら我慢もできよう。しかし!!主人を罵倒したとあらば私は許さん!!そしてシュブルーズだったか?貴様も教師なら生徒を馬鹿にする様な言動をしてどうする!!教師とは生徒に授業をしてやるだけでは無い筈だぞ!!」

戒の物凄い剣幕に当初は激昂していた筈のルイズでさえ呆気にとられ教室中は急に静かになっていた。そして漸くしてから現実に戻ってきたシュブルーズが戒に対して謝罪してきた。

シュブルーズ「教師のあるまじき行為でしたね。ごめんなさい。」

戒「私には無く、主人のルイズにして貰いたい。」

シュブルーズ「そうね、ごめんなさいね。ミス・ヴァリエール?」

ルイズ「そ、そんな、私は別にそこまでは。」

マリコルヌ「……………」

「シュブルズ先生！？マリコルヌが立ったまま気絶しています！？」

シュブルズ「すぐに」

戒「少し待て。」

シュブルズが生徒に指示をしようとした時、戒が上段から下りてきて気絶しているマリコルヌの近くまで来た。

戒「まったくこの程度で気絶するとは……」

シュブルズ「何をするのです？」

戒「なに、目を覚まさせるだけですよ。」

そう言い戒は懷より紙袋を取り出し袋の入り口から息を吹き込みパンパンに膨らませて一気に叩き潰した。

” パアッーン ”

マリコルヌ「！？」

その音に生徒達はびっくりし、目の前にいたマリコルヌはその音で目を覚ました。

戒「目、覚めたか？」

マリコルヌ「は、はい！？すみませんでした！！」

戒「謝るのは私ではない。貴様が馬鹿にした我が主人だ」

マリコルヌ「ル、ルイズ、さつきはごめんなさい。」

ルイズ「い、いいわよ。もう気にしてないから。」

マリコルヌはルイズに謝罪をしたが当の本人は先程の出来事で毒気を抜かれた様で気にしていない様子である。

戒「ミセス・シュブルズ、邪魔してしまつてすみません。私を気にせず授業を再開して下さい。」

シュブルズ「いえ、いいですよ。私も教師として見習う所がありましたから逆に感謝します。さて、授業を再開しますよ？」

戒の言葉にシュブルズは逆に感謝を述べ、授業を再開した。

シュブルズ「わたしの二つ名は赤土。赤土のシュブルズです。

土系統の魔法を、この一年、皆さんに講義をします。ミスタ・マリコルヌ、系統魔法はいくつありますか？」

マリコルヌ「は、はい。ミセス・シュブルズ。火、水、土、風の四つになります。」

シュブルズ「後は失われた系統魔法である虚無を合わせて五つあるのは皆さんもご存知ですね？その中で土の魔法は重要な役割の多くを占めているとわたしは考えています。それは、わたしが土系統だから、というわけだけではありませんよ。もちろん、わたしの身びいきでもありません。」

シュブルーズはそう言って一息ついて重々しく咳をした。

シュブルーズ「土と言うのは万物の組成を司る重要な魔法であります。これが無ければ金属を作る事も出来ませんし、それを加工する事も出来ません。家を建てる為の石の切り出しや農作物の収穫など今より難しくなります。このように、土系統の魔法は皆さんの生活に密接な関係にあります。」

戒はほお、とシュブルーズの講義を聞き、やはり世界が違々と色々な事が違う事を再確認していた。

シュブルーズ「今から、皆さんには土の基本である、錬金を覚えてもらいます。一年で出来る様になった人もいますが基本はとても大事ですので、もう一度、おさらいする事にしましょう。」

そう言ってシュブルーズは自身の持つ小ぶりな杖を石ころに向かって振り、短くルーンを呟くと石ころが光りだし、光りがおさまり、その石ころだったものはピカピカに光る金属に変わっていた。

キュルケ「ゴゴ、ゴールドですか！？ミセス・シュブルーズ！？」

キュルケが驚き、その勢いで身を乗り出して聞いた。

シュブルーズ「違いますよ？ミス・キュルケ。ただの真鍮ですよ。ゴールドを錬金できるのはスクウェアのメイジだけです。わたしはただの……」

こほん、ともったいぶる様な咳をして、シュブルーズは言った。



シユブルーズ「ただのトライアングルですから。」

戒「ただの自慢でしかないな。」

タバサ「あなたは何者？」

戒の独り言に対して隣にいたタバサは先程の殺気について戒は何者かを聞いた。

戒「俺か？ただの平民だよ？」

タバサ「それはうそ。あの殺気は平民に出せる物じゃない。」

戒のおどけた答えにタバサは即答し、普通の平民があのような殺気を放つ事は出来ないと言った。

戒「では、なんと答えれば納得がいくのかな？」

タバサ「あなたの事を聞きたい。」

戒「それは使い魔としてか？それとも、戦人としてか？平民としてなのか？」

タバサ「どちらも。」

戒「ふう、まずは私の世界から話した方がわかりやすいかな？」

タバサ「あなたの世界？」

戒「ああ、私の世界はタバサ嬢達の世界とは完全に別物になりますよ？」

タバサ「どう違うの？」

戒『まずは、このハルゲニア？でしたか？この世界と私のいた地球と言つ世界はいわば平行世界、所謂パラレルワールドって事になりますね。こちらでは魔法が主流ですが私の世界では科学、こちらでは絡繰りになりますかね？それが発展した世界になります。』

タバサ「科学？魔法は無いの？」

戒『科学と言つのは主に機械技術等を指します。魔法の方はごく一部の者が使っていますね？ただ名称が違いますが。』

タバサ「メイジじゃない？」

戒『色々な言い方がありますね。こちらのメイジにあたる人は魔法使い、他には魔術師、この魔術師は、西洋魔術、東洋魔術の二通りがありますね。あとは私の知る魔法に関係する者達の名称はこんな感じですかね？』

タバサ「あなたは？」

戒『私か？私についてはこの枠外になるかな？』

タバサ「なぜ？」

戒『そこは側で聞き耳を立てているミス・キュルケ嬢も一緒に別の機会にしましょうね？』

そう言つて戒はキュルケに視線を向けた。

キュルケ「あら？バレてたの？」

戒『当たり前ですよ？その位判らなければ情報と言うのはすぐに広まってしまつからね？』

キュルケ「広まるとまずいの？」

戒『そうだよ？情報と言うのは戦闘等、色々な事柄でとても重要だからな。』

そう戒達が話している間にシュブルズの授業は進みルイズが石の練金をする場面まで来ていた。

シュブルズ「さあ、ミス・ヴァリエール、あなたの練金したい金属を思い描きなさい。」

そしてルイズは自身の杖を振り上げ、真剣な表情で小さくルーンを呟く。

タバサ「隠れる。」

戒『何故だ？』

タバサ「いつも爆発。」

戒『私は大丈夫だ。防御用の魔法を使うからな？もし隠れないなら私の側に居ると良い。キュルケ嬢もだぞ？』

キュルケ「じゃあ、わたしも側に行くわ。」

そう言つてタバサとキュルケは戒に寄り添う様な形で集まつた。そして…ルイズが杖を振り下ろした瞬間。

戒『（風花・風障壁）』

戒が防御魔法を唱え、目に見えない楯が現れた。そして教室中が眩い光に包まれとてつもない爆発と轟音がなり教室中は阿鼻叫喚の図になっていた。

戒『ミセス・シユブルーズは大丈夫か？』

戒の心配はもつともである。ルイズの魔法を至近距離で受けて煤まみれになり痙攣を起こしていたのだから。本人であるルイズもで倒れていたがすぐに立ち上がったがその容姿は煤まみれで所々衣服が破け下着等が見えている状態であった。

タバサ「今のは？」

戒『先程、使ったのは風の防御魔法で中位クラスの物で瞬間的に障壁を展開する。防御力はご覧の通りだ。』

キュルケ「にしても、あなたの風系統の魔法もだけど教室もすごい状態ね？」

そんな戒達をよそに他の生徒達は未だにさわいでいた。

## 第二話（後書き）

タバサの口調が難しくタバサらしからぬ喋り方になっていきますが  
容赦をm（――）m

### 第三話（前書き）

決闘の場面まで一気に書いたので投稿が遅れてしまいました。

### 第三話

ミスタ・コルベール、彼はトリステイン学院に奉職し二十年の中堅の教師であり2つ名は「炎蛇」その名の通り火の系統に長けた人物である。彼は先の>春の使い魔召喚の儀式<でルイズが召喚した青年の事が気になっていた。正確にはその青年の左手の甲に刻まれたルーンが気になって昨日の夜から今まで図書館に籠もって書物を読み漁っていた。

トリステイン魔法学院の図書館は食堂の本塔の中に存在していた。本棚は驚愕する程に大きく、高さはおよそ30メートル程があり本棚は壁際に並んでいるのはただ壮観の一言に尽きる。

そして、彼は、一般生徒が閲覧している区画とは別にある区画で教師のみが閲覧を許されている一区画でフェニアのライブラリーの中にいた。

一般生徒が閲覧出来る所には彼の満足する答えは無く、「レビテーション」浮遊呪文を使い手の届かない所を浮かびながら目当ての本を一心不乱に探していた。

そして、始祖ブリミルが使役したと言われる使い魔達の事が記述された書物をコルベールはようやく見つけその本に書かれている使い魔のルーンに関する一節に釘付けになりその部分を食い入る様につくりと読み、其処に描かれたルーンと召喚の儀で青年の左手に現れたルーンの書かれたスケッチブックと照らし合わせる。

コルベール「!？」

彼は声にならない声を上げた。一瞬「レビテーション」に割いていた集中力が切れ落ちそうになった。彼は慌ててその本を小脇に抱えて床に下りると、学院長室に向かって走り出した。

学院長室は本塔の最上階に位置しており、そこに、このトリステイ

ン魔法学院の学院長を務めるオスマンは白い口ひげと髪を揺らし、重厚な作りをしたセコイアのテーブルに肘をつき退屈そうにしていた。

ぼんやりとし、鼻毛抜いていたがおもむろに引き出しを引き中から水ギセルを取り出した。

が、この部屋の端にある席に座り書き物をしている秘書のミス・ロングビルは羽ペンを振った。

そして、水ギセルが宙を飛びミス・ロングビルの手元の前に置かれた。

オスマン「年寄りの楽しみを奪って楽しいんか？ミス……」

オスマンがつまらなそうに呟いた。

ロングビル「学院長の健康管理をするのも秘書であるわたしの仕事なのですわ。」

オスマンは椅子から立ち上がり理知的な顔立ちが凛々しいロングビルに近づいた。そして、ロングビルが座る椅子の後ろに立ち、重々しく目を瞑った。

オスマン「こうも平和な日々が続くと、時間の過ごし方と言うのがとても大事な物になってくるのじゃよ。」

オスマンの顔に刻まれた皺が彼の生きてきた歴史を物語っていた。百歳や二百歳などとも言われているが実際の年齢は誰も知らず、本人も知らないかもしれない。

ロングビル「オールド・オスマン……」



ロングビルは羊皮紙に羽ペンを走らせながらオスマンの名を呼ぶ

オスマン「なんじゃ、ミス……？」

ロングビル「いくら暇だからと言ってわたしのお尻を触らないで貰えますか？」

ロングビルの言葉にオスマンは口を半開きにして年寄りの様な歩き方を始めた。

ロングビル「都合が悪いとボケる振りをするのも止めて頂きたいですわ。」

どこまでも冷静な声のロングビルにオスマンはため息をついた、深く、苦悩の刻まれる物であった。

オスマン「真実は何処に在るのじやろうか？考えた事はあるかね、ミス……」

ロングビル「確かな事は少なくともわたしのスカートの中には無い事です。もっともらしい事を言われていないで机の下にネズミを忍び込ませるのを止めて下さい。」

オスマンは悲しそうな顔で俯き呟いた。

オスマン「モートソグニル。」

机の下から小さなハツカネズミが現れ、オスマンの足を上り、肩の上にちゃんと乗って首を傾げた。オスマンはポケットからナッツを取り出しソグニルの目の前で左右に振る。ちゅうちゅうと喜ぶ様に

ネズミは鳴いた。

オスマン「モートソグニル気を許せるのはお前だけのようじゃ。」

ネズミはナッツを齧り始めた。齧り終わると餌を催促するかの様に再びちゅうちゅと鳴く。

オスマン「そうかそうか。もっと欲しいか？ならば、くれてやろう。だが、その前に報告じゃ。」

ちゅうちゅ

オスマン「そうか、白か、純白か。しかし、儼としてはミスには黒が良く栄えると思うのじゃ。そうは思わぬか？可愛いモートソグニルよ。」

ロングビル「眉がピクリと動いた。」

ロングビル「オールド・オスマン。」

オスマン「なんじゃ、ミス……？」

ロングビル「次にやりましたら王室に報告いたします。」

オスマン「カーツ！！王室が恐ろしくて魔法学院院長が務まるものかー！！」

オスマンは目を見開いて年寄りとは思えない気迫で怒鳴る。

オスマン「パンツを見られたくらいで起こりなさんな。だから婚期を逃すのじゃよ。ふう〜〜、若返る様じゃな〜〜？ミス……。」

オスマンはロングビルのお尻を堂々と撫で回した。そして、ロングビルは椅子から立ち上がり、しかるのちに無言で上司であるオスマンを蹴り回すのである。

オスマン「ちょっ！痛い！ごめん！もう止めて！ほんともうしないから！」

オスマンは頭を抱えてうずくまるが、ロングビルは怒りが収まらない様で息を荒くしながら尚もオスマンを蹴り続ける。

オスマン「あだっ！こら！老人を！あいたっ！扱っ！のは！いかんぞ！マジで！痛い！！！」

そんな平和な時間になんの前触れもなく闖入者により破られた。ドアがガタン！と破る様に開けられてコルベールが中に勢いよく入ってきた。

コルベール「オールド・オスマン！！！」

オスマン「なんじゃね？騒々しい。」

ロングビルは既に机に向かって座っており、オスマンは腰の後ろで腕を組み闖入者であるコルベールを迎え入れると言う無駄な神業を見せた。

コルベール「たた、大変です！？」

オスマン「何が大変な事じゃ？大変な事などありわせんよ。全ての事は小さき事じゃ。」

コルベール「とと、兎に角、ここ、これを見て下さい！？」

そう言つてコルベールはフェニアのライブラリーから持ち出して来た古書をオスマンに見せた。

オスマン「こりゃ、「始祖ブリミルの使い魔たち」ではないか君はまーたそんな古臭い物を持ち出して来おつてからに。そんな事に精を出しておる位ならば、弛んでおる貴族共から上手い事、金を徴収する手立てを考えてはどうじゃ。ミスタ……なんじゃっけ？」

オスマンは本気で首を傾げていた。それにコルベールは怒る様に言う。

コルベール「コルベールです！！オールド・オスマン！！お忘れに成られましたか！？」

オスマン「そうじゃった、そうじゃった。そんな名前じゃったな。どうも君は早口でいかな？それで、コルベール君？この古書がどうかしたのかね？」

コルベール「此方を御覧下さい。」

コルベールは戒の左手に現れたルーンの書かれたスケッチブックをオスマンに手渡した。

そのスケッチを見たオスマンの表情はすぐに変わり眼光が鋭くなつて厳しい色を見せた。

オスマン「ミス・ロングビル、少し席を外しなさい。」

オスマンの声にロングビルは席を立ち上がり、院長室を音を立てずに退室する。オスマンはそれを見届けてから再びコルベールに向き直り、重々しく口を開いた。

オスマン「ミスタ・コルベール、詳しく説明し、聞かせなさい。」

ルイズの魔法で滅茶苦茶になった教室の中を昼前までに片付け終わった。片付けたルイズとカイは昼食を摂る為に食堂へ向かっていた。カイ『ゼロのルイズ…か。』

ルイズ「なによ！あんたも馬鹿にするわけ！？」

カイ『そうじゃないよ。わたしのよりも君の2つ名の方が格好いいと思ったただだよ？』

ルイズ「意外ね？あんたみたいな平民が2つ名を持っているなんて」

カイ『でも「ゼロ」みたいな格好いい物では無く畏怖を込められた名前が多かったな。』

ルイズ「例えば？」

カイ『…そうだな？暴君や死神に悪鬼羅刹や鬼神などと挙げれば切りがないな。』

カイのその説明にルイズは呆れた様なため息をはく。

ルイズ「はあ…、もういいわ。聞いてたら最悪な物しか出て来ないわね。」

カイ『だから言っただろ？畏怖を込めた2つ名だと。』  
そう話をしながら食堂に向かってしていると入り口の近くにタバサが立っていた。

タバサ「……………」

カイ『どうも、タバサ嬢どうかしたのですか？』

タバサ「カイとまた話がしたかったから……」

カイ『あの時の話が面白かったのですか？』

タバサ「……………楽しかった。」

ルイズ「ふん！！なによ！？タバサなんかデレデレしちゃって！！」

カイとタバサが会話をしているとルイズが急に怒りだしカイを置いて食堂の中に入ってしまった。

カイ『ふむ、我がマスターはご立腹の様だな。タバサ嬢、話はまた今度にしようか。』

タバサ「……………わかった。」

カイの言葉にタバサは残念そうな声で了承し、食堂の中に入って行った。

それを見送ってからカイも食堂に入ってルイズの近くに来了。そしてカイは自分の分の食事が無い事に気が付いた。

カイ『マスター、私の食事が無いのだが？』

カイの言葉にルイズは怒り心頭と言った感じで答える。

ルイズ「他の女にデレデレしているアンタの食事なんて無いわよ！？」

カイ『な、なんだと！？』

ルイズの言葉にカイは驚愕した。

ルイズ「使い魔のアンタは主人のわたしを放って他の人と喋っていたのだから当然でしょ？」

ルイズは自業自得と言い食事を始めてしまった。そしてカイはそのまま食堂を出る事になってしまった。

カイ『参ったな。マスターを怒らしてしまって食事抜きとは笑えんな。』

???「カイさん、どうかなさいましたか？」そう言って近くの壁を背に寄りかかっていると誰かが話しかけてきた。

カイ『君は……シエスタだったか？』

シエスタ「はい。ところでこの様な所でどうかなさいましたか？」

シエスタの問いにカイは苦笑する

カイ『なに、我がマスターのご機嫌を損ねてしまい食事を抜かれただけだ。』

シエスタ「そうなんですか。なら厨房に来て下さい。そこならわたしたちの賄い料理がありますので分けてあげれますよ？」

そう言つてシエスタはカイを連れて食堂の裏にある厨房に向かった。厨房にはオーブンや大きな鍋がいくつも並んでおり、コックの人に給仕の人が忙しく動いていた。

シエスタ「此処で少し待つて下さいね？」

そう言つてシエスタはカイを厨房の片隅にある椅子に座らせて厨房の奥に消えて行つた。そして、暫くしてお皿を抱えて戻つて来た。お皿の中には湯気が立つ暖かなシチューが入つていた。シエスタ「お待たせしました。これは貴族の方々にお出しする料理の余り物で作つたシチューです。どうぞ食べて下さい。」

カイ『ありがとうございます。いただきます。』

カイはシエスタの持つて来てくれたシチューを味わいながら食べた。

カイ『ふう、ご馳走様。とても温かみがあつて美味しかったよ。』

シエスタ「お口にあつて良かったです。もしよろしければまたお腹が空いたら来て下さい。」

カイ『ありがとうございます。ならその時にはまたご馳走になるよ。』

シエスタ「ええ、また来て下さいね？」

カイ『何かお礼をしたいのだが何か無いか？』

シエスタ「そんな、お礼だなんて！」



カイ『すまん？これも性分な物でな？』

シエスタ「それでしたら、貴族の方々に食後に出すケーキの配膳を手伝って貰えますか？」

そしてカイは銀のトレイを受け取りシエスタと別々に貴族の人達にケーキを配って行った。

カイ『配膳と言うのは意外と大変なのだな？』

カイは一人納得していると少女とぶつかり、倒れそうになった少女を倒れない様に抱き寄せた。

???「きゃっ！」

カイ『おつと…。大丈夫か？』

抱き寄せた少女を見ると目尻に涙を溜めており、カイは驚愕し焦った。

カイ『！？どこか怪我でもしたか？』

???「い、いえ。大丈夫ですわ！」

カイ『私はカイ。君は？』

ケティ「すいません。わたくしはケティ・ド・ラ・ロッタですわ。」

カイ『それではミス・ケティ。何故、その様に泣いておられるのだ？』

ケティ「…それは、わたくしの慕っていたギーシュ様に裏切られて

しまい、とても悲しくてですわ。」

カイ『つまり、二股をしていたと言っ事ですね？』

ケティ「はい。ギーシュ様はわたくしとは別にモンモランシー様とお付き合いらつしやるとお噂になっていましたがギーシュ様は自分の心にはわたくししか居ないと仰って下さった。ですのに……うっ、うう。」

ケティはカイにそう言つと泣いてしまった。カイはそんなケティの涙を指で拭い頭を優しく撫でる。

ケティ「え……？」

カイ『安心しなさい。ケティ嬢やモンモランシー嬢の二人の悲しみは私がしっかりとそのギーシュに教えてあげるよ？』

ケティ「そ、そんな！？危ないですわ！あなたは平民なのに、高名な貴族であるギーシュ様にかないませんわ！」

カイ『心配は無用です。』

そう言つてカイはケティから離れて先程ケティが走つてきた道を行くと金髪の如何にもキザつたらしい少年がおり何やら騒いでいて目の前には恐怖に怯えたシエスタがいた。

ギーシュ「君の所為で二人のレディが傷付いてしまったじゃないか！？どうしてくれるんだ！？」

シエスタ「も、申し訳ありません。わ、わたしは別にその様なつも

りでは……。」

カイ『シエスタ、謝る必要は無い。』

ギーシュの剣幕にシエスタは怯え謝っていたが、カイがそれを遮る形で割り込んだ。

ギーシュ「……なんだね、君は？」

カイ『そこにいるメイドの手伝いをしている者でカイと言う。』

ギーシュ「カイ……？ああ、確か召喚の儀でゼロのルイズが召喚した平民か。なら、貴族に楯突くとどうなるか……。」

カイ『そんな事どうでも良い。貴様は二股をし、二人の少女を悲しませた、そしてあまつさえその責任をシエスタになすりつけて責任逃れを図った。男の風上にもおけないな？』

ギーシュ「野蛮な平民だけあつて貴族への礼儀を知らん様だな。」

カイ『お生憎様、貴様の様な奴に対する礼儀なぞ持ち合わせておらんのだから？』

ギーシュ「良いだろう！其処まで言うのであれば、貴様に決闘を申し込む！！」

カイ『此処でやるのか？』

ギーシュ「ふざけるなよ。貴族の者達が食事をするこの様な神聖な場所を汚らしい平民たる貴様の血で汚したくはないのでな。ヴェス

トリの広場にて待っているぞー!!」

カイ『ヴェストリの広場だな?』

ギーシュ「逃げずにくるんだな。」

そう言つてギーシュは羽織つたマントを翻して食堂を出ていった。  
そして先程から怯えていたシエスタをみる。

カイ『シエスタ、大丈夫か?』

シエスタ「貴族の方に喧嘩を売るなんて、死ぬのと同じですよ!?!」

シエスタは怯えた声でそう言つてその場を走つて逃げてしまった。  
その後すぐにルイズ達が近づいてきた。

ルイズ「ア、アンタなにを考えてるのよ!? 貴族に平民が勝てる訳無いでしょ!?! すぐに謝つて決闘を止めてきなさいよ!?!」

ケティ「ごめんなさい。わたくしの所為でこの様な事になってしまつて...。」

カイ『済まんな、ルイズ。コレばかりは譲れないよ。それにケティ? 俺は君の様な可愛い子を泣かした時点で奴を許すつもりは無いよ。』

ルイズ「馬鹿よ。アンタは...。」

ケティ「そんな、可愛い子だなんてノノ」

ルイズ「ちよつ、ケティ! しっかりしなさいよ!?!」

カイ『さて、ヴェストリの広場に行くか。』

「平民こつちだ、ついて来い。」

ルイズ「ああ！もう！知らないわよ！？」

ルイズの言葉を聞くもカイは頑なに拒みギーシュが見張りに置いていったメイジについて行った。そしてヴェストリの広場に着くとギーシュが造花の薔薇を口にくわえて待つており、その周りをローマの闘技場宜しくな感じの円形にメイジ達が陣取っていた。

ギーシュ「平民、よく逃げずに来たな。」

カイ『逃げる理由が無いのでな。それにしてもギャラリーが多いな？』

ギーシュ「君の敗北を大衆に見せる為だよ。」

ギーシュは尚も余裕な様子でカイに話しかけてきた。

カイ『お前の間違いじゃないのか？』

ギーシュ「……何時まで減らず口を叩いて居られるか見物だな！！  
諸君よ！決闘だ！！」

「「「わああああ！！！！」」」

「ギーシュ！平民なんてぶっ殺しちまえ！」

「平民に貴族の恐ろしさを刻んでやれ！！」

カイの言葉にギーシュは眉をぴくりと動かし、くわえていた薔薇を

自身の上に掲げ、宣言をする。その言葉に周りにいたメイジ達が野次を飛ばしてきた。

ギーシュ「僕はメイジだから魔法を使わせて貰うよ？」

カイ『どうぞ。俺も似たような物を使わせて貰うがな？』

ギーシュ「ふん、虚言を。僕の二つ名は「青銅」青銅のギーシュだ。行くぞ！！「練金」！！」

ギーシュは造花の薔薇を振り薔薇の花弁が地面に落ちるとそれは瞬時に甲冑を着た女性の様な青銅のゴーレムが出現した。

カイ『ゴーレムか…。』

ギーシュ「どうした、平民。僕の「ワルキューレ」に恐れをなしたか？」

カイ『いや、造形がかなり雑だと思ったただけだ。』

カイのその言葉にギーシュは怒った。

ギーシュ「貴様！！最初は謝れば許そうと思ったが、もう我慢ならない！やれ「ワルキューレ」！！」

ギーシュの言葉に従い、青銅のゴーレム「ワルキューレ」はカイ目掛けて襲いかかってきた。

カイ『ふむ、雑で動きも鈍いか…造形魔法でこれか、クラスはドットと言った所か。』

カイがそうギーシュに話している後ろから人を掻き分けてルイズが前に出てきた。

ルイズ「ちよっと、ギーシュ！」

ギーシュ「やあ、ルイズ。ちよっと君の失礼な使い魔を借りているよ。」

ルイズ「貴族の決闘は学院では禁止されてる筈よ！」

ギーシュ「貴族…とはね？平民なのだから問題は無い筈だよ？」

ルイズ「そ、それは前例が無かったからで…」

カイ『ルイズ、下がっている。』

ルイズ「ア、アンタもアンタよ！何、勝手な事をしてるのよ！？」

カイ『俺はコイツに女性を泣かせた事について怒っているだけだ。』

ギーシュ「なら、どうした。」

カイ『貴様が女を泣かした事について判るまでしつかりとご教授しよう。』

ギーシュ「何を言っている！！僕の「ワルキューレ」に手も足も出ない癖に何ふざけた事を言っているんだ！！」

カイの言葉に対し、ギーシュは怒りながらも「ワルキューレ」を動かしカイを襲うがカイはルイズを危なくない場所に移動させながら避けるばかりであった。

ギーシュ「平民！避けてばかりでは僕の「ワルキューレ」には勝て

ないぞ！」

ルイズ「そうよ！基本的に平民は貴族には勝てないのよ！？」

カイ『ふむ…ならば、俺が我がマスターにとって最高の使い魔だと言う事を見せてやるよ！！』

”ドガンッ！！”

そう言つてカイは「ワルキューレ」を素手で殴り飛ばした。

ギ、ル「… なっ！？！？」

「ワルキューレ」が吹き飛ばされた事にギーシュは驚愕し動きを止めてしまっていた。

カイ『呆けている場合か？』

ギーシュ「良いだろう！！その余裕を無くしてやる！！」

カイの言葉で我に返ったギーシュはすぐに薔薇の花弁を全て地面に落とすと先程の吹き飛ばしたゴーレムと合わせて七体の「ワルキューレ」を出現させた。

カイ『なんだ？様子見でもしていたのか？』

ギーシュ「貴様には一体で十分だと思つたが僕も我慢の限界だ！！僕の全力である七体「ワルキューレ」にやられるが良い！！」

そう言つてギーシュは槍や剣、斧等の武器を持たせたゴーレムを力イに襲わせた。



”ブオン！！” ヒュン！！” ドゴンッ！！”

ゴーレムは様々な武器でカイに襲いかかるがカイは汗一つ掻かずに避け、拳だけで二体のワルキューレを殴りとばした。

カイ『やはり、破壊しないといかんか…。』

ギーシュ「素手で僕の「ワルキューレ」は壊せないぞー！」

カイ『その様だな。』

ギーシュの言葉にカイは避けながら懷に手を伸ばし、金色の指輪を取り出して自身の人差し指にはめる。

ギーシュ「指輪等出したからといって僕には勝てないよ？」

カイの行動にギーシュは疑問を持ちながらも自身の勝利を揺るぎない物と感じていた。

カイ『ふつ。その余裕が命取りだ！！逝くぞ！？』

”ドガッ！！” ”バキッ！！”

そう言つてギーシュの近くまで周りにいたゴーレム達を拳や足を使い吹き飛ばした。

ギーシュ「何をやっても僕の「ワルキューレ」には傷一つ付かないよー！！」

カイ『それはコイツを喰らってから言うんだな!!>リクラック・ラ・ラック・ライラック<”来たれ、雷、薙払え。”「雷の斧」! ! ! ! !』

”ズツガーーンツ!!!!!!”

カイが詠唱を始めると次第に右手に白い雷が迸り直視出来ない程の光を放つそれを右手で振り七体いた青銅の「ワルキューレ」は四体程消し飛んだ。それを見たギーシュは狼狽えた。

ギーシュ「な、何なんだね君は!?!」

カイ『まだ終わっていないと言うのに、この程度で狼狽えるとは弱いな?』

ギーシュ「くっ!?!舐めるなよ!?!平民風情がつ!?!」

カイの言葉で更にギーシュは激昂し残りの三体の「ワルキューレ」を三方向から攻めた。

ギーシュ「これなら...どうだ!?!」

ルイズ「カイ!?!」

ケティ「カイ様!?!」

その動きにルイズと後から来たケティはカイの名を叫んだ。

カイ『マスター達は何を慌てているのだ?』

カイはいつの間にか剣を持ちその場に立っていた。

ギーシュ「 なっ！？僕の「ワルキューレ」は何処に…。」

カイ『それなら、貴様の後ろに一体だけは吹き飛ばしたぞ？』

ギーシュ「 なにつ！？ 」

カイの言葉に驚き、ギーシュは後ろを振り向くと確かに其処にはゴ  
ーレムが転がっていた。

ギーシュ「他の二体の「ワルキューレ」はどうした！？」

カイ『それなら、先程の攻撃の際に細切れにしたよ。』

そう言うカイの足元をよく見ると確かに青銅の鉄屑が散らばっていた。

カイ『さて…と。』

カイはそう言つてギーシュに向かい歩き始めた。

ギーシュ「く、来るな！？」

ギーシュはそう叫んで自身の後ろにいた「ワルキューレ」をカイに  
向けて突進させた。

カイ『邪魔だ。』

” ヒュオン！！ ” 斬！！ ”

” ドシャツ！！ ”

突っ込んで来た「ワルキューレ」をカイは道端に落ちている石の様にあしらった。そして、ギーシュの目の前にたどり着いた。

ギーシュ「あ、ああ……。」

”チャキツ！”

カイ『覚悟は…出来てるな？』

カイはそう言ってギーシュの目の前に剣先を待ってきた。

ギーシュ「ま、参った。降参だ。」

カイ『決闘とは命を掛けた戦いだ。降参等無いに決まっているだろう。』

ギーシュ「そ、そんな!？」

カイ『では……さよなら。』

”ヒュオン!!!!!!”

ルイズ「カイ!!! 殺しちゃ駄目——!？」

ルイズが叫んだ刹那

”ドンツ!!!”

ギーシュ「?」

ギーシュは来るべき痛みが無い事に不思議に思い目を開けると自身

の横に剣が深々と刺さっていた。

カイ『我がマスターに感謝するのだな!!』

ギーシュ「は、はい!!」

ギーシュは壊れた機械の様に何度も頷いていた。

カイ『だが!!』

”バキッ!!”

ギーシュ「ぐはっ!!」

”ズシャー!!”

カイそう叫んでギーシュの横っ面をぶん殴りギーシュは慣性に従い横に吹き飛ぶ。

ルイズ「!?ア、アンタねえ!ギーシュを殴るなんて、何してんのよ!!」

カイ『マスター、何をしてるとはなんだ?ただ制裁を下しただけだが?』

ルイズ「だからって殴る必要は無い筈よ!」

カイ『……マスター、忘れてる様だから言っておきますが事の発端は奴の二股なのです。その制裁をちゃんとしなければ奴の為にもなりませんし彼女達の痛みも判りませんよ?』

ルイズ「だからって…」

ギーシュ「いや、その使い魔君の言う通りだよルイズ。」

ルイズ「ギーシュまで！」

カイ『理屈だけじゃわからない、其処には拳を交えないと男と言う者は判らないのだよ。』

ギーシュ「さつきのは心の奥にまで響いたよ。」

カイ『なら、お前は次にどうするべきか判るな？』

ギーシュ「ああ、ミス・モンモランシーやミス・ケティ、それにメイド…いやシエスタ嬢に謝る事だね。」

カイ『心を傷付けられた女の子は並大抵の事じゃ許してくれないぞ？』

ギーシュ「大丈夫。しっかりとけじめとして態度や行動でしっかりと示して行くよ。」

カイ『ならば、俺からはもう何も言うまい。』

ルイズ「もう！アンタ達、訳わかんないわよ！！」

ギーシュ「諸君！この決闘は僕の負けだ！！」

「ギーシュが負けたぞ！！」

「あの平民、さっき魔法を使って無かったか!？」

ケティ「カイ様：素敵です／＼」

ギーシュは周りの者達にそう叫ぶと周りのメイジ達は騒ぎ出したがケティだけかなりズレた発言をしていた。その時！

???「だらしないぞ!!ギーシュ!!」

そう叫んだメイジがギーシュに向かって見えない何かを放った。しかし…

”斬!!”

放たれた物はカイによって防がれた。

カイ『風系統の魔法か…。』

ギーシュ「何をするんだ!!ヴィリエ!!」

先程、カイが防いだ攻撃を見てギーシュはその生徒に向かって非難の声と共にヴィリエと呼ぶ。

ヴィリエ「ふん、平民如きに負ける奴に名前を呼ばたくは無いな!」

ギーシュ「ヴィリエ、それは違うぞ!？さっきの事は僕が間違っていただけで彼はちつとも悪くは無い!!」

ヴィリエ「貴族が平民に負けた事自体良くない事なんだ。だから、その平民は僕が殺す。」

ヴィリエのその言葉に広場の空気が凍った。

ルイズ「ヴィ、ヴィリエ何言ってるのよ!？」

ヴィリエ「魔法の使えない「ゼロ」のルイズは黙っている!」

ヴィリエのその言葉にカイは静かに怒りを覚えた。

カイ『マスター、下がっててください。やたらとプライドが高い者はしっかりとそのプライドをへし折ってやらないと判らない奴が多いです。』

カイはそう言つてルイズ達から離れてヴィリエと呼ばれた生徒に向かって歩いていった。



### 第三話（後書き）

この後はオリジナルを混ぜたヴェリエとの決闘が入ります。

## 第四話

カイとギーシュの決着が付く少し前の学院長室の中でオスマンにコルベールが真剣な顔で説明をしていた。

春の使い魔召喚の儀でルイズが青年を呼び出し、「契約」した証拠として左手に現れたルーン文字が、気になっていた。

そして調べていたら……

オスマン「始祖ブリミルの『ガンダールブ』に辿り着いた、と言う訳じゃな？」

オスマンはコルベールがスケッチに書いたカイの左手にあるルーン文字を見つめていた。

コルベール「そうです！あの青年の左手に刻まれたルーンはあの伝説の使い魔『ガンダールブ』と酷似いえ、全く同じと言えます！！」

オスマン「…して、君の結論は？」

コルベール「あの青年は紛れもなく、あの『ガンダールブ』！それ以外に何かあるのですか！？オールド・オスマン！」

コルベールは禿げ上がった頭を、ハンカチで拭きながら激しい口調でオスマンにまくし立てた。

オスマン「ふむ……、確かに、この書とスケッチに書かれたルーンは同じじゃ。しかし、そのルーンが同じと言うただの平民である青

年が伝説の「ガンダールブ」になった、という事になるんじゃないかな。」

コルベール「どうでしょう?」

オスマン「じゃが、それだけで彼が「ガンダールブ」と決め付けるのは早計かも知れぬ……。」

コルベール「それもそうですね。」

オスマンはコツコツと人差し指で机を突いていた。そこにドアをノックする者がいた。

オスマン「誰じゃ。」

オスマンがドアを叩く者に問うと、ミス・ロングビルの声が聞こえてきた。

ロングビル「わたしです。オールド・オスマン。」

オスマン「ミス・ロングビルか。どうしたのじゃ?」

ロングビル「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるようで、大きな騒ぎになっています。騒ぎを止めに入った教師がいましたが生徒達に邪魔されてしまい止められない様です。」

ロングビルの報告にオスマンは軽い頭痛が起きた様に頭を右手で軽く痛みを抑えるかの様に手を当てた。

オスマン「まったく、暇を持て余した貴族ほど、性質の悪い生き物はおらん。して、報告にあった暴れている者は一体、誰なんじゃ

「？」

ロングビル「1人はギーシュ・ド・グラモン。」

オスマン「あの、グラモン家のバカ息子か…、父親の方は色の道では剛の者じゃったが、息子の方も輪をかけて女好きじゃ。大方、女の子の取り合いじゃろ。相手は誰じゃ？」

オスマンの問いにロングビルは少し間を開けて話す。

ロングビル「……それが、相手はメイジではありません。ミス・ヴァリエールの召喚した使い魔の青年の様です。」

オスマンとコルベールは顔を見合わせた。

ロングビル「教師達は「眠りの鐘」の使用許可を申請しています。」

オスマンの瞳が鷹の様に鋭く光る。

オスマン「アホか。たかが子供の喧嘩、そんな事に学院の秘宝を使つてどうするのじゃ。放っておきなさい。」

ロングビル「わかりました。」

コツコツとミス・ロングビルが去っていく足音が聞こえた。

コルベール「オールド・オスマン…」

オスマン「わかっておる。」

そう言つてオスマンは壁に掛かった大きな鏡に向けて杖を振つてギーシュとカイの決闘を見た。……………そして彼等は「遠見の鏡」で決闘の一部始終を見終え、コルベールは若干震えながらオスマンに話し掛ける。

コルベール「オールド・オスマン。」

オスマン「うむ。」

コルベール「……………あの平民の彼、勝つてしまいましたね。」

オスマン「うむ。」

コルベール「ギーシュは一番低いドットメイジですが、ただの平民に後れをとる事は無いはずです。そして！あの動き！あんな平民見た事などありません！やはり彼は伝説の「ガンダールブ」なのです！」

オスマン「しかし、本当にそうなのじゃろうかな。」

コルベールの話を聞きながらもオスマンは未だに半信半疑であつた。そこにコルベールは更に興奮気味でオスマンに話し掛けてくる。

コルベール「何故ですか！オールド・オスマン！？」

オスマン「確かにあの青年はメイジに勝つた。しかし「ガンダールブ」はあらゆる武器を使うと伝わっておるが彼は武器を使わずに、我々の知らぬ魔法の様な物を使ってドットではあるがギーシュ君を退けておる。」

コルベール「確かにあの様な魔法は見た事などありません。」

オスマン「まだ、彼を「ガンダールブ」とするにはルーンが同じと言っただけでは決め手にはならんじやろ。」

コルベール「オールド・オスマン！」

オスマン「今度はなんじゃ？コルベール君。」

コルベールの叫ぶ声にオスマンは呆れた様な声色でコルベールの名を呼んだ。

コルベール「それが、ヴィリエ君が今ギーシュ君にいきなり風系統の魔法で攻撃したのですが、あの平民が手に持った剣でその風を斬った様なんです。」

オスマン「なんじゃとー!!」

コルベール「ヴィリエ君は確かラインメイジの筈です。如何にあの平民が強くて流石に不味いのでは……」

オスマン「しかし、ヴィリエ君には悪いがこれで彼がガンダールブが確認出来るじやろ。」

コルベール「そうですね。」

そうコルベールとオスマンは「遠見の鏡」で再びカイをみた。

カイ『さて、貴様は何故、先程ギーシュに不意打ちをしたのだ？』

ヴィリエ「ふん！平民に負けた奴等いなくても良いだろ？」

ル「な！？」

ヴィリエの言葉にルイズやこの場にいる生徒達は絶句した。

カイ『その様な考えをする者は少なからず良い印象は持たれませんよ？』

ヴィリエ「貴様！平民風情が貴族である僕に意見なんてするんじゃない！！」

カイ『御託は良いからさっさと掛かってこい。』

ヴィリエ「平民如きが貴族に逆らうとどうなるか教えてやるよ！」  
エア・ハンマー「！！」

ヴィリエはそう叫びながら圧縮した風魔法を放って来た。それをカイは何も構えずに立っていた。

ルイズ「ちょっと、カイ！なにをボサツとしてるの！？」

カイが動かない事にルイズは怒鳴っていた。

カイ『…トレース…オン！「同調、開始」』

カイは小さくそう呟くと両手に黒と白の二本の対となる剣を投影した

カイ『甘い！！』

”斬”

カイは迫りくる見えない圧縮された風を斬り伏せる。その様子にヴィリエは叫ぶ

ヴィリエ「一体何なんだよ！貴様は！？」

カイ『そう言えばしつかりと名乗って居なかったな…』

ヴィリエ「平民がいい加減舐めるなよ！？俺はヴィリエ・ド・ロレ―ヌ！貴様に名乗るのもおこがましいがな！」

カイ『改めて、我が名は日本帝国軍所属黒逸戒准将！！推して参る！！』

全「……なっ！?!?!」

カイの名乗りにヴィリエを始め、周りの生徒達は驚愕していた。

カイ『どうした。名乗りを聞いて臆したか？』

ヴィリエ「貴族である俺がそんな事になるか！！それに、貴様の名乗りに等騙されないぞ！ほら吹きが！」

カイ『なら、そのほら吹きにやられると良い。』

ヴィリエ「舐めるなっ！「エア・スピア」！！」

カイの言葉に激昂したヴィリエはカイに向けて「エア・スピア」を放つ。だが怒りに任せて放ったからか、カイには無くルイズにそ



の矛先が向けられた。

カイ『（不味い！）マスター！』

ルイズ「きゃっ！」

”ズシャツ！！”

ルイズを庇った瞬間、何かを貫く様な音とルイズの顔に温かい液体の様な物が少し降り掛かった。

ルイズ「な、何よ…これ。」

カイ『（不味いな、何故か解らんが「神の12の試練」が上手く発動していないみたいだな。）マスター……無事か？』

ルイズ「無事かって、アンタの方が無事な状態じゃないわよ！？」

カイ『確かに…ゴフツ！胸に風穴を開けられてしまっているから…無事とは言い難いか。』

カイはルイズを突き飛ばした時に心臓の付近を「エア・スピア」により明らかに小さくは無い傷を付けられており、そこからはかなりの量の血を流しており、ルイズはそれを悲鳴に近い声を上げていた。

ヴィリエ「あ…、ああ……。」

カイのそんな状態をヴィリエは怯えた様子で見ていた。そしてカイは重傷にも関わらずに立ち上がりヴィリエの前に歩もうとしていた。

ルイズ「ちよつと！？そんな身体でどこに行く気よ！？」

カイ『何処につて、まだ決着はついていないのですよ？』

ギーシュ「ルイズの言う通り、これ以上は流石に危ないと僕も思うよ。」

ケティ「カイ様！ギーシュ様の仰る通りで、そのような身体で無茶ですわ！？」

カイ『ゴホツゴホツ！！それでも……ですよ。戦いとは命のやり取り、この様な事は何度もありましたから、心配無用です。そして何よりも、ヴィリエでしたっけ？あの様にプライドの塊の様な輩は一度そのプライドを完膚無きまでにへし折ってやらないとそれがどれだけちっぽけな物なのか判らない者なんですよ？』

ルイズ達が止める様に言うがカイはそれを拒否し、決闘を続けると言った。

ヴィリエ「フ、フン！平民が強がりやがって！！今の僕の最強の風魔法で止めを刺してやるよ！！」

そう言つてヴィリエはルーンを唱え始めた。

カイ『……なら、此方も風でお相手しよう。』

ヴィリエ「そんな虚仮威しにビビるものか！！」「エア・カッター」  
「！！」

”フォン！！”

ルイズ「カイ！？逃げなさい！？」

ギーシュ「使い魔君！？」

ケティ「カイ様！？」

ルイズ達が迫りくる風の刃に身構えもしないカイを見て悲鳴を上げるがカイはそれに構わないで自身も風の魔法を放つべく詠唱を始めていた。

カイ『>風よ、我に逆らう敵を斬れ。<「ウィンド・カッター」！  
』

” ヒュヒュン！！ ”

ヴィリエの魔法に対してカイは同属性の物を放つがヴィリエが一つの風に対してカイは二つの風の刃を放っていた。

” バシュツ！！ ” 斬っ！！ ”

そして、両者の放った風魔法は、一つ目の風は相殺し、カイの放った風魔法の二つ目でヴィリエの持つ杖を真つ二つに斬った。

ヴィリエ「う、うわぁ！？」

杖を斬られた事にヴィリエは驚きの余りに後ろに尻餅をついた。

カイ『さて、小僧…、まだ……やる気か？』

屍餅をついた状態のヴィリエにカイは静かに近づき感情が何も感じれないとても冷徹な声で問う。

ヴィリエ「あ、ああ……。参った……。降参する。」

カイ「ふむ、ならばまず、貴様が不意打ちしたギーシュに謝り、次は傷つきそうになった、我がマスターにも謝罪をしてもらおう。」

ヴィリエ「わ、分かったよ。その、ギ、ギーシュ！ごめんなさい！」

ギーシュ「なにを気にする必要があるんだ？僕のケガはカイの物だからでヴィリエの物が無いのに謝る必要があるのかい？ルイズもそう思うだろう？」

ルイズ「そうね。わたしとしては逆に重傷を負わせたカイの方に謝ってほしいくらいよ。」

キュルケ「へー。アンタにしては珍しく良心的ね？何時ものアンタの性格なら使い魔の方に八つ当たりをしてそうなのになぁ？」

ルイズ「なっ！？ツエルプストー！アンタ何時の間にいたのよ！」

キュルケ「いつ、どこに居ようとわたしの勝手でしょ？」

ルイズ「何ですってえー！！」

カイに先を施されてヴィリエはルイズ達に謝るがギーシュは許すも何もと言った感じでルイズはカイを心配した発言をし、何処からい

たのか判らないがキュルケにおちよくられていた。

カイ『良い友人達を持っているじゃないか。』

ヴィリエ「は、はい！」

カイの言葉にヴィリエは泣きながら答えた。

ルイズ「はっ！？そうだわ！カイツ！？傷は大丈夫なの！？」

カイ『大丈夫ですよ？既に魔力を傷口に回したので出血は止まっていますし直に完治しますよ。』

ルイズ「まったく！ご主人様をヒヤヒヤさせて、心配したんだからね！？」

カイ『マスターが心配してくださるとは……光栄の極みです。』

ルイズ「べ、別にアンタがじゃないわよ！？アンタがいなきゃ誰がわたしの使い魔をやるのよ！ー！」

カイ『そうでしたね。！？つと』

ルイズとたわいもない話をしていたカイだが急にフラついた様子で膝を地に着けた。

ルイズ「ちょっ、ちょっと！？どうしたのよ！？」

カイ『マスター、すい……ません。少々……血を流し過ぎたみたいです。』

ルイズ「あれだけ無茶をしたんだから当然よ!？」

カイ『すいません。少し休めばいつ…も通り…マ…スターのお側に  
……』

ルイズ「ちよつと!?!カイ!!返事をしなさいよ!？」

キュルケ「落ち着きなさいよ!ただ寝ているだけよ。」

カイは意識が朦朧とした状態でルイズと会話をしていたが途中で意識を手放してしまい、ルイズは焦り、倒れたカイを揺さぶるが隣にいたキュルケにより止められた。

ルイズ「まったく、世話の掛かる使い魔ね!」

ルイズはそう言ってカイを担ごうとするが身長差がありすぎて引きずる様にしかなくなってしまった。

キュルケ「まったく、ルイズ?待ちなさいよ。」

そう言ってキュルケは自分の杖を取り出し、カイに「レビテーショ  
ン」のルーンを唱えて浮かせるのであった。

ルイズ「…ありがとう。ツエルプストー。」

キュルケ「驚いたわ!あのルイズが素直にお礼を言うなんて……明日は槍でも降るんじゃないかしら?」

ルイズ「何ですって、ツエルプストー!?!こっちが素直に感謝をし

たのに何よ！！その態度は！？」

キュルケ「あら、ごめんなさい。」

ギーシュ「2人共？とりあえず早くその使い魔君を休ませてはどうかかな？」

ルイズ「そ、そうよ！！まったく、ツエルプストーを相手にしてる場合じゃないわよ！！」

そう言つてルイズは「レビテーション」で浮いているカイを押しながら寮のある方向に歩いていった。そんな一部始終を「遠見の鏡」で見ていたオスマンとコルベールは互いに溜め息混じりな声色で話をするのであつた。

コルベール「…あの平民、二人目にも勝ってしまいましたね。オールド・オスマン。」

オスマン「うむ。」

コルベール「直前の事は戴けませんでしたが、ヴィリエ君はラインメイジ、ギーシュ君と比べると確かに優秀なメイジですがプライドが高すぎると言つ悪い点もあります。が、ただの平民にああも簡単に倒されるなんてまず有りません。」

オスマン「うむ。」

コルベール「これらの結果を見ればあの平民はやはりあの「ガンダールブ」で間違いありません！！」

オスマン「うむ。」

コルベール「早速この事を王室に報告して指示を仰がないと!!」

オスマン「それには及ばん。」

オスマンは重々しく頷いた。そして彼の蓄えた白い髭が揺れる。

コルベール「何故ですか!? 現代に再び現れた「ガンダールブ」!  
!これは世紀の大発見ですよ! オールド・オスマン!？」

オスマン「ミスタ・コルベール。「ガンダールブ」はただの使い魔ではない。」

コルベール「その通りです。始祖ブリミルが用いたガンダールブ。姿形は記述されていませんが、主人の呪文詠唱の時間を守る事に特化した存在だとされています。」

オスマン「左様、始祖ブリミルの呪文は強力じゃ、じゃがそれ故に詠唱がとても長い。知つての通り詠唱中のメイジは無防備じゃ。それを守る為に用いたのがガンダールブ。その強さは…」

オスマンの言葉をコルベールが興奮気味に引き継いだ。

コルベール「一人で千人の軍を殲滅する程の強さ、さらに並のメイジでは全く歯が立たないと。」

オスマン「それで、ミスタ・コルベール。」

コルベール「はい。」



オスマン「その平民の青年は本当にただの平民だったのか？」

コルベール「ミス・ヴァリエールが召喚した際に見た時は見慣れない服を着ており軍人に近い雰囲気を持つておりました。そして、デイトクト・マジックをかけましたが軍人の雰囲気は有りましたが普通の平民でした。」

オスマン「その青年をガンダールブにした生徒は、一体誰なんじゃね？」

コルベール「ミス・ヴァリエールですが…。」

オスマン「彼女は優秀な生徒だったのかね？」

コルベール「優秀と言うより、寧ろ無能だったかと……。」

オスマン「その二つが謎じゃな。」

コルベール「そうですね。」

オスマン「無能なメイジと契約しただけで青年がガンダールブになった理由が判らん。まったくの謎じゃ。」

コルベール「そうですね。」

オスマン「王室のバカどもにガンダールブと主人を渡す訳にはいかん。そんなもんを渡したりしたらそれを理由にしてまた戦を始めかねん。宮廷で暇を持て余している連中は戦が好きじゃからな。そんな、くだらん事にあの青年は巻き込みたくない。」

コルベール「はあ。学院長の深謀には恐れ入ります。」

オスマン「この件は儂が預かる。ミスタ・コルベール、他言無用じやぞ?」

コルベール「は、はい!かしこまりました!」

オスマン「それにしても、ガンダールブとは一体どの様な姿をしたのだじやろうな。」

コルベールは夢を見る様に呟いた。

コルベール「あらゆる武器を使い、敵と対峙したのですから…」

オスマン「うむ。」

コルベール「とりあえず、腕と足はあったんでしょね。」

その後はなんともまとまらない話をしているのであった。

決闘の騒ぎのその夜、ルイズは自分の部屋にあるベッドで寝ているカイを心配そうに見ていた。

ルイズ「カイは大丈夫かしら。」

シエスタ「大丈夫ですよ。ミス・ヴァリエール。」

ルイズ「そうは言っても……」

シエスタ「使い魔さんは寝るだけと言っていたのですからその言葉を信じて待つてあげればよろしいと思いますよ？」

ルイズ「…そうね。起きたら文句を言つてやるんだからね。」

シエスタ「ミス・ヴァリエールもお休みになられてはどうですか？」

ルイズ「ええ、そうするわ。貴女も夜遅くまでありがとね。」

シエスタ「いえ、元々、わたしの不注意で招いてしまい、使い魔さんに迷惑を掛けてしまいましたから。」

ルイズ「コイツの事だから、そんな事は関係無いつて言うでしょうね。まったく…。」

シエスタ「ふふ、そうかも知れませんか。それでは、ミス・ヴァリエール。お休みなさいませ。」

ルイズ「ええ、お休み。」

ルイズと話をしていたシエスタはそう言つて部屋を退室していった。

ルイズ「まったく、心配を掛けたのだから、明日にはしっかりとそこら辺の事を話してやるん…だから…ね。」

そう言つてルイズも眠りに落ちていった。

#### 第四話（後書き）

所々にオリジナルを入れましたので何か付け足した方が良いやアドバイスをもらえると助かります。

## 第五話（前書き）

今年初めての投稿のクロイツヴァルトです。今回の話では自分でもかなり無茶な話になってしまっています。

## 第五話

次の日の朝方。カイはいつも通りに目を覚ました。

カイ『（何故、俺はベッドで寝ているのだ？）ルイズは…、』

シエスタ「目が覚めましたか？」

ベッドに寝ている事を不思議に思いながら、部屋の周りを見ようとしたら、ちょうど部屋にパンと水が乗っている盆を持って入って来たシエスタに声をかけられた。

カイ『シエスタ？私はどの位、寝ていたんだ？』

シエスタ「カイさんは決闘の日から2日間寝ていましたよ？」

カイ『大体、3日位か。（原作通りと言うか、世界の修正力とは恐いものだな。）シエスタが私の看病を？』

シエスタ「いえ、わたしではなく、そこにいるミス・ヴァリエールが寝ずにカイさんの包帯の取り替えやお顔や体の汗を拭いていましたよ？」

カイ『マスターが？』

シエスタの言葉を聞き、ルイズを探すと机の上で突っ伏して柔らかい寝息を立てて寝ているのを見つけた。良く見ると愛らしい顔の睫の下に隈を作っているのが見えた。

カイ『隈を作るまで俺の看病をしてくれていたのか。（俺の油断が

招いた事だが鍛錬の見直しが必要か……。）」

思案しているとルイズが欠伸をしながら目を覚ました。

ルイズ「ふああああ〜。」

カイ『マスター、お早う御座います。』

ルイズ「あつ！カイ、起きたの？」

カイ『はい。この度はご迷惑をお掛けしてすみませんでした。』

ルイズ「そんな事はいいわ。あれはわたしが不注意だったからあんたが謝る事じゃないわよ。」

カイ『しかし……』

ルイズ「反論は無しよ！」

シエスタ「ご、ごゆつくり。」

ルイズの様子を見てシエスタは苦笑しながら退室していった。

ルイズ「とりあえず、傷の方は大丈夫なの？」

カイ『心配しているのですか？』

ルイズ「そ、そんな事ないわよ！！ただ、アンタが治ってない状態だと倒れられても困るだけだからよ！」

カイ「そうか。」

ルイズ「で、どうなの？」

カイ『無論、大丈夫だ。』

ルイズ「そう。なら、いいわ。」

カイ『いつまでもマスターのベッドを使う訳にはいかないな。』

そう言つてベッドから出て腹部の包帯を取り服を着る。

ルイズ「ふん、当たり前よ！貴族のベッドは普通は平民のアンタは寝れないんだからね！」

カイ『では、マスターはゆっくり休んでくれ。私は少し外に出てくるから…。』

ルイズ「何よそれ、どこに行くか詳しく教えなさいよ！」

カイ『少々、ヴェストリの広場に…。』

ルイズ「何のためによ？」

カイ『鍛錬の為と平民から脱する為とだけ言っておこう。』

ルイズ「訳わかんないわよ！いいわ！わたしもついて行くわよ！！」

カイ『しかし、マスターよ。君は寝不足ではないのか？』

ルイズ「そんな事、アンタの用事が終わってから寝れば良いのよ！？」



カイ『ふつ、了解した。ならば早く済ませるとしよう。そこで盗み聞きしてる二人はどうするのかね?』

キュルケ「あら?バレてたの?」

タバサ「アナタの事に興味がある……。」

ルイズ「ツエルプストー!?なんで、アンタが此処にいるのよ!!」

キュルケ「あら、ルイズとダーリンだけでどこに行くか気になるじゃない?」

タバサ「わたしはあの使い魔が気になっただけ……。」

キュルケ達がいる事にルイズは驚愕し質問するがさも当然の様に答える二人にルイズは更に激昂する。

カイ『行くのか?行くなら早くしてもらえるか?他の者達が起きてくると些か面倒なんでは……。』

そう言つてカイは部屋を出て行つた。

ルイズ「ちょっと!?待ちなさいよ!!」

キュルケ「もう、待ってよ。ダーリン。」

タバサ「……。」

そして、一行はヴェストリの広場に着くとカイがルイズ達には判らない方陣を広場の中央に描いていた。

ルイズ「何をしてるのよ？」

カイ『マスターよ、悪いのだが少し、静かにしてもらえるか？』

ルイズ「なんでモガモガ!!」

キュルケ「ルイズ少しは静かにしたらどう？」

騒ぎだしそうなルイズをキュルケが手で口を抑えながら抱える  
タバサ「…何か召喚するの？」

カイ『ほう。タバサ嬢は感じが良いな。まあ召喚はあっているがこの世界とは全く違う魔法だな。』

そう言つてカイは方陣を触りながら呪文を唱える。

カイ『素に銀と鉄

「Das material ist und Eisen.」  
礎に石と契約の大公

「Der Grunestoin irt aus Stein  
und der Gross horzog des Vertr  
dag.」祖には我が大師シュバインオーグ

「Der Ahnist meiner grosser M  
eisetrschweinorg.」

降り立つ風には壁を

「Schutz gegen einen hcfziger W

ind.

カイが呪文を唱え始めた途端、方陣が輝きだした。

ルイズ「何が始まったのよ!？」

キュルケ「判らないわよ！?…タバサは判る？」

タバサ「彼はわたし達が知らない召喚魔法を使いたい。」

二人「召喚！？！？」

ルイズ「使い魔が使い魔を呼ぶ事が出来るの!？」

キュルケ「判らないわ。ただ、ダーリンの様子を見る限りかなり凄  
いやツを呼ぶみたいね。」

3人が話している間にもカイは召喚の儀式を続けていた。四方の門を閉じ王冠より出で

[Schlissalles Tor, Gehausd  
er Krone].

王国に至る二叉路は循環せよ

em Koning [zirkulier die Gabelung nach d

閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ

[illegible]

繰り返すつどに五度ただ満たされる刻を破却する

Nur ist es die volle Zeit gebr  
[Es wird einmal wiederholt.

ochen.」

- - - Anfang

告げる

「- - - Satz.」

「告げる」とカイが言った瞬間、方陣の光が強くなる。汝の身は我が下に我が運命は汝の剣に

「Du“derl’st alles mir, Mein Schicksal“derl’st Alles deinem Schwert.」

詠唱が終わった瞬間、方陣を中心に眩い光が辺りに充満する。

ルイズ「何も見えないじゃない!!」

タバサ「……何かいる。」

タバサは光で見えないにも関わらずその先に何かいる事に感じた。

???「貴方がわたし達を召喚したのですか?」

???「サーヴァントの複数召喚等聞いたことはありません!」

???「いんじゃないの?来ちまったもんはしかたねえだろうが。」

カイ「様子からしてライダーにセイバー、そして、ランサーって所か?」

ライダー「はい。私のクラス名はライダーになります。」

セイバー「私のクラス名はセイバーです。」

ランサー「んで、俺がランサーだ。にしても、兄ちゃんはずげな  
一目で俺達のクラス名を当てるなんてよく？」

カイ『サーヴァントが三人か…。成果は上々と言つか、予想以上だな。』

セイバー「それで、貴殿が我々を召喚した、と言つ事で間違いありませんね？」

カイ『ああ、間違い無いよ。この両腕と右の甲にある、令呪が証拠だ。』

ライダー「確かに。わたし達の令呪の様ですね。」

ランサー「で、俺達を呼び出したって事は聖杯戦争に参加するって事か？」

カイ『戦争には参加しない。』

セイバー「何故!？」

ランサー「じゃあ、なにか?てめえは戦争をしねえのに俺らを呼んだのか?」

カイの言葉にセイバーは驚愕し、ランサーは若干ではあるが濃い殺気をカイに向けていた。

カイ『早まるなよ…。クー・フリーリン。』

ランサー「テメエ、何故我が真名を知っている!!」

カイ『貴様の真名だけでは無い。騎士王にメデューサも知っている。』

二人「「なっ!!!!!!!!!!」」

ランサー「得体の知れねえマスターだな。」

ライダー「わたし達を呼んだ理由は一体なんですか?」

カイ『理由は2つ。1つ目は自身の鍛え直しの為。2つ目の方は俺がいない時の我がマスターの警護だ。2つ目の方を最優先に行ってくれ。』

ランサー「英霊相手に自身の鍛え直しをしたいとは随分な自信だな。」

キュルケ「ちょっと、ちょっと!わたし達を置いて話を進めないでくれるかしら?」

ライダー「貴女達は?」

ルイズ「わたしはルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。アンタ達を召喚したアイツの主人よ。」

キュルケ「私はキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フオン・アンハルツ・ツェルプストー。火のトリアングルメイジで2つ名は「微熱」よ。よろしくね?」

タバサ「…タバサ。」

セイバー「はあ。」

キュルケ「あはは、ごめんなさいね？この子、口数が少ないから。この子はタバサ。風のトライアングルメイジで2つ名は「雪風」よ。」

タバサ「……」

ライダー「そ、そうですか。（表情が全く読めません）」

ランサー「で、俺達は呼び出したは良いがどこに寝るんだ？」

ルイズ「はっ！？そ、そうよ！アンタ含めて四人もわたしの部屋は広くないわよ！！」

カイ「とりあえず、ルイズの部屋にはライダーが居てくれ。非常時の時には宝具を使用してくれてもいい。」

セイバー「我々は？」

カイ「セイバーとランサーは、ちょっと待ってて。」

そう言つて目を閉じてカイは自身の能力を使い、森の奥にコテージを創り出した。

ランサー「ひゅゝ すごえじゃん。」

セイバー「あれが貴方の能力ですか？」

カイ『まあ、その一部みたいな物だな。他にもあるがまた今度だな。』

ルイズ「アンタってほんとに何者よ！？こんな物作れるなんて聞いてないわよ！？」

カイ『聞かれていなかったからな。まあ、良い。私の事を説明する前にコテージに入ってからしよう。』

セイバー「この場では無理なのですか？」

カイ『長くなるからな。』

タバサ「…早く行く。」

タバサはカイの服を引っ張りながら急かしていた。

ルイズ「ちょっと、待ちなさいよ！-！」

セイバー「我々も行きましょう。」

ランサー「だな。とりあえず、行くしかないしな。」

ライダー「そうですね。」

キュルケ「もう何がなんだか、理解が追いつかないわね。」

先に行ったカイ達を追い掛ける形でキュルケ達はコテージに向かつ



た。

## 第五話（後書き）

サーヴァント三人の召喚をしまった主人公のカイでした。この後はコテージにてカイがM u v - L u vにいた時の過去話になります。

カイ『三人は無理があるんじゃない？』

作者「俺があの人3人が好きでお前が召喚するなら少し無茶をしてでもだしたかったんだよ！？」

カイ『少しは自重しろよ！！』

作者「だが！断る！！」

カイ『死ね！！刺し穿つ死刺の槍「ゲイ・ボルグ」！！！！』

作者「万難非す楯「アイギス」！！」

カイ『防ぐな！！』

作者「防がんと死ぬわ！？」

カイ『こんな駄目作者ですが読者の皆様、ユーザーの方々これからもよろしく願います。』

作者「俺の台詞取られた！？orz」

## 第六話（前書き）

過去話になる筈がサーヴァント組との模擬戦になってしまいました  
グダグダな気がしますますが叩かないで下さい m ( \_ \_ ) m

## 第六話

コテージ内

ランサー「以外に広く出来てんだな。」

セイバー「外見からはそうは見えなかったですね？」

戒『空間操作の魔法を応用して作っているから見たよりかは広くなっているぞ？それに俺が設定したのだから当たり前だろ？そして、外見上は二階建てだが、実際には地下に広がる様に出来ていて俺の工房も一緒に作ってあるし、訓練場もある。生活面ではキッチンもあれば食材も豊富にある、そして地下で栽培も出来るから街に行つて一々買いに行く必要も無い。今後の予定ではあるが状況に応じた地下施設を増築する予定も立てている。』

ライダー「施設としては充分過ぎますね。」

ルイズ「それで、何処で話をするのよ？」

戒『なら、地下に行くか…。彼処ならば広いから…。こつちだ。』

戒の先導の下に一同は奥の部屋に入る。すると部屋の中央に何かの魔法陣が描かれていた。

ライダー「転移の陣…ですか？しかし、人の身で失われた技術をこの様にして覚えたのですか？」

戒『それはまた今度な？今はこの世界の前にいた俺の過去を話す。それに、転移の陣と言うが、俺の描いたコレは正式には移送方陣と呼び、コイツで地下まで降りるから階の設定もするから俺の後に入

つて来てくれ。〔起動〕』

そう言つて戒は陣の中心に立ちキーを紡ぐと陣の文字列が光り、戒は光に分解されて消えた。

セイバー「わたし達も行きましょう。」

ランサー「今回のマスターは面白い奴だな 知らねえ術があるし退屈せずに済みそうだな」

ライダー「貴方はそれしか無いのですか？」

タバサ「……………」

サーヴァント組とタバサはさつさと転移陣の上に乗し、戒と同じ様に消える。

キュルケ「ほら、ルイズ行くわよ？」

ルイズ「わ、判つてゐるわよ！そんなに急かさないでよ！」

そしてルイズと急かしてくるキュルケも同様に陣に入った。そして、他と変わらずに光となり消える。

コテージ内地下20階

戒『よし、全員来たな…。』

戒とルイズ達がいるのは先程のコテージから1?程深い場所で灯りには赤い宝石の様な物が周りの壁と天井には一際大きい物が埋め込

まれる様にして辺りに配置されていた。そして、広さとしては城の大広間と同じ位か若しくは少し下位の広さがありその中心では丸いテーブルを囲む様にして戒達が座っていた。そしてそのテーブルの床下と卓上には先程の部屋と同様に魔法陣が描かれていた。

戒『さて、全員揃った事だし、まずはサーヴァント組には先程の聖杯戦争の不参加の説明した方が良いな…。』

ランサー「そうだな…。確かに不参加の人物が何故俺達を召喚したのか聞きてえ所だったからな？」

セイバー「そうですね。確かに我々は聖杯戦争に参加する為に喚び出され、戦う筈でしたから、ちゃんと説明して頂かなければ納得がいきませんから。」

戒『だろうな…。まず、ランサー達がいるこの世界は冬木市でもなければ地球でもない。まったくの別世界で所謂異世界（パラレル・ワールド）と呼べる場所で勿論の事ではあるが、聖杯自体存在しない。』

サーヴァント組「聖杯が存在しない！？」

戒の一言にセイバー達は驚愕の声を上げる。

セイバー「で、では何故我々を召喚出来、尚且つ現界出来ているのですか！？我々英霊の召喚と現界は聖杯があつて初めて起こせる奇跡なのですよ！？」

戒『落ち着けて。一つずつ説明するから、まずは何故聖杯が存在しないのに召喚が出来たのは俺の魔力を呼び水にしてセイバー達の

世界の魔法陣の知識とキーを知っていて尚且つ、喚ぶための依り代を全てを所持していたからだ。で、2つ目の現界についてだが厳密には違つて半受肉化と言う状態でこの世界に喚んだんだ。』

ランサー「半受肉化：？んな言葉は聞いた事ねえぞ？」

戒『それはそうだろう？召喚する際の陣に俺がこの世界から消えるか死ぬかするまでは常に現界出来る様にしてあるし、半受肉化だから姿を隠す為の霊体化も出来るから心配しなくても大丈夫だぞ？』

ライダー「召喚の陣にそんな事をして良くわたし達を正確に呼び出せましたね」

戒『そりゃあ、俺がライダー達と同じ様に宝具を持っているし、ゲイボルグやエクスカリバー等を持っている訳だからライダー達を召喚出来て当たり前だ。』

ランサー「俺達と同じ宝具を持っているだと？」

セイバー「俄に信じられませんか。」

戒『まあ、そうだろうな…。』

戒の言葉にランサーとセイバーは先程までとは雰囲気ガラリと変わり、濃厚な殺気を戒に当てるが戒は顔色一つ変えず、普通に返す。

ライダー「英霊の殺気を受けて良く普通でいられますね？」

戒『この位では前の世界では別段不思議な事でも無いよ…。』

セイバー「戒、先程の言葉の真偽を確かめて置きたいのですが宜しいでしょうか？」

戒『そうだな…。ならこの下に丁度良い広さの部屋があるから其処で模擬戦をするか…。〔開錠〕』

戒は席を立ち、自分の後ろの壁に手を当てて、移送方陣と同じ様に呪文を唱えると当てていた壁が開き、人が1人余裕で通れる入り口と下の階に繋がる階段が姿を現した。

ライダー「自分の家に隠し扉…ですか」

戒『ちよつとした遊び心だ…。さつさと行くぞ？マスター達はどうする？私達の模擬戦を見に来るか？』

ルイズ「当たり前じゃない。使い魔の戦い方を把握しとくのもご主人様の仕事よ。」

キュルケ「勿論よ ルイズとは違うけどダーリンの戦う姿を見てみたいしね」

タバサ「参考」

戒『そうか、ああ、そうだ、セイバーとランサー、それにライダーもだが真名の解放をしても大丈夫だからな？周りの壁は硬度で言えばダイヤモンド以上で固定化の魔術を使ってあるから派手に暴れてもまず壊れる事は無いさ。』

戒は入り口に入る前に後ろにいるセイバー達に言々と戦闘狂と予備軍の2人は目を光らせ、対象外のライダーはただその内容に呆れ、



壁の強度を聞いたゼロ魔組は驚愕の目で壁を見ていたがタバサだけは「ディテクト・マジック」で視ていたのかあまり驚きはしていなかった。

## 地下21階 第1訓練場

戒「マスター達は入り口横にあるその陣の描いてある席から見えてくれ、対物理障壁（アンチ・マテリアル）に対魔法障壁の複合型の方陣だ。それと遠くからでも見える様に遠見の魔術も併用してある俺特製の物だから俺以上の魔力を持った奴がいない限り安全だし、障壁を破壊する程の術は使わないから安心して其処から観戦してくれ。」

キウルケ「ダーリンってば色々な事に精通しているのね」 益々惚れちゃうわね」

タバサ「後で教えて」

戒「時間があれば教えるさ…。」

ランサー「おい、おっ始めるならさっさと殺ろうぜ！」

ライダー「まず最初に誰とやるのですか…？」

戒「ん？何を言っているんだ？時間が勿体無いから3人纏めて相手をするぞ？」

ライダー「はい？」

セイバー「サーヴァントの中で三騎士と謳われる我々を纏めて相手

をされると言われるのですか！」

ランサー「確かに時間の短縮にもなるが、お前さんのそれは自信と言っよりも過信と言った方が良いかも知れねえな…。自信過剰は戦場では命取りだぞ？」

戒『ふむ…。ならば言い方を変えよう…。別にセイバー達を馬鹿にしている訳でも無く、慢心している訳では無い、ただ、この位の事をしなければ俺の実力が判らないと思ったただけだ…。』

セイバー「なら、簡単にはやられないで下さいよ？」

戒『判っている。それとこの訓練場はあらゆる環境下での訓練が出来る様に魔法で作り上げる事が出来る。先ずは森林での戦闘で設定しておくか。モニター展開、フィールド設定…森林、風速は通常、地面は泥濘を少々…。これで良いかな？』

戒が自分の目の前の空間にモニターを展開し状況設定をしモニターを閉じると同時に訓練場内に魔力が急増しその場に光が満ちた。そして、その光が収束するとそこは辺り一面が木々で生い茂った所に変わっていた。

ライダー「此処ではその様な事も出来るのですね。」

戒『これだけじゃないぞ？模擬戦用のダミーを出す事も出来るし、予め自身の動きをトレースさせて置けば自分自身との戦いも出来る様になっているから自身の戦闘フォームの見直しや弱点の克服が可能となっているし、自身のゴーストのlevelを上げる事で自身が思いつかない様な動きもしてくれるから参考にもなるから利便性の高い施設となっている。』

ランサー「そりやすげえな 今の状態からさらに上を目指せるって事は良いじゃねえか」

セイバー「確かに己自身と戦える機会は無いですからね。」

戒『それじゃあ説明も終わった事だし…始めるぞ!!』

戒の言葉を皮切りにセイバー達は先手必勝と言わんばかりに一気に詰め寄るが戒は足下の地面を吹き飛ばし、その際に生じた砂煙に乗じて、その場から離れる。

セイバー「くっ！目眩ましとは卑怯ですよ!!」

ランサー「今のは戦士としては良い判断だと思うぜ？多人数を相手にする場合には先ずは距離を離して相手をばらけさせて各個撃破が定石だが、俺達にそれをやるだけの胆力があるのは誉めていいかも知れねえな」

戒の行動にセイバーは非難の言葉を上げるが、逆にランサーは賞賛をする。そして戒は少し離れた場所で木の上に気配を断ち乗っていた。

ライダー「此处で言い争っていても仕方ないでしょう？先ずは戒を見つけるのが先決ですよ？」

ランサー「だな。」

セイバー「ですが何処にいるので…」

セイバーの言葉を遮るかの様に木々の間から幾筋の光条が矢の様にセイバー達に襲いかかるが直ぐにそれを察知してそれを回避する。地面や木に着弾した光条は其処を起点にするかの様に周りを凍らす。

ライダー「！いきなりですか！？」

ランサー「はっ！様子見にしちゃあ派手な攻撃だな！」

セイバー「氷結系の魔術ですか！対魔力値が高いとは言え、食らってしまえば暫くは身動きが取れない物のようですね。」

ライダー「厄介ですね。此方の居場所はバレていてあちらの居場所は判らず…ですか。」

ランサー「悪手になるが散開して探して見つけた奴が派手な行動で場所を教えるって事で良いだろうな。」

セイバー「確かにソレしか無いですね…。」

ライダー「では、また後で。」

ランサー「誰が先に見つけるか勝負でもするか？」

セイバー「模擬戦だからと言ってもふざけないで下さい！」

ランサー「セイバーは堅いな 勝負は楽しまないとだろ。」

セイバー達は軽口や叱責しながらその場をバラバラに散開した。

戒『ふむ…。やはり散開したか…。なら此方もそれなりの準備をして置くか。」「煉獄黒鎌」シャドウ！「魔黒外装」プルート！』

戒は肩に手を当て、そのまま引き抜くとその手には漆黒の鎌が握られ、次の瞬間地面の下から禍々しいまでの黒と紫が混じる障気のような物が吹き出し、周りを腐食させる。その障気が徐々に戒の体に沿うよう形を成すと鎧の様な物になり、体に纏うその鎧は黒色で統一され、さながら死神の様な容姿になっていた。

戒『精霊の武装化は初めてだが理論的には可能だった。拒絶反応はとりあえずは無し…。』

ライダー「やっと見つけましたよ。」

戒が1人で現在の自分を分析しているとライダーが先程の障気に反応し、戒を見つけた。

戒『1番手はライダー…。』

ライダー「先程までとは姿が違いますね？（あの鎧と鎌から高い魔力を感じますが一体どう言う事ですか？アレ等の正体や能力が判らないだけに不気味ですね。）」

ライダーは相対する戒に両腕を交差させる様に地に手を着き獣の様な体制で構える

戒『ぶつつけ本番の新術だ。失敗をしないかヒヤヒヤしたが成功したし、適合率も申し分ないがまだまだ改良点のある物だな？物質化するのにまだ時間が掛かるから改善策としては時間短縮化が課題だ

な……。』

ライダー「確かに強力な物と判りますが、その様な大きな得物は狭い場所ではあまり振り回せないと見えますが？」

戒『コイツを受けて見ればそれが判るぞ！』

ライダー「なっ！？」

ライダーが驚愕するのも無理は無い。何故なら戒が振るった鎌の刃が木の幹に当たる瞬間にまるで実体がそこに無いかのようにすり抜ける様を見れば物質と言う物は隔たりがあればぶつかると言う常識がそれには無いからである。しかし、そこはやはり英霊としてかすぐ様、冷静さを取り戻して迫り来る刃を後退して回避する。

ライダー「今のは一体……」

戒『どうした？ライダー…俺は普通に鎌を振っただけだぞ？そら！まだまだ逝くぞ！』

ライダー「くっ！」

戒は唐竹割り、袈裟切りや逆袈裟に風払い等と普通に刀を振る要領で自身の持つ鎌を振り回し当然の如く木や地面をすり抜けてライダーにその刃を閃かせる。

ライダー「あの得物の大きさを振り抜く速さにわたしがやっと反応が出来るとは最早反則ですね（しかし、ぶつかる物にぶつからずにすり抜けてくるあの奇抜とも取れる斬撃は常人は反応する前に首や胴体が2つに断たれてしまうでしょうし、わたしとしても厄介極

まりない物ですね…。」

戒『どうしたライダー！お前の力を見せてみる！』

ライダー「くっ！これ以上は好きにさせません！」

ライダーは戒目掛けて鎖付きの杭の様な短剣を投げるそれを戒は体を反らして避けるがライダーはその隙に距離を一気に離し、両目を隠していた眼帯を外し自身の象徴たる石化の魔眼を解放する。対魔力を持たない人間であれば瞬く間に物言わぬ石へと変えられ、持つ者は若干動きづらくなってしまう。そして、その魔眼、キュベレイの能力を最大まで発揮する為にライダーはその名を叫ぶ。

ライダー「〔自己封印・暗黒神殿〕ブレーカー・ゴルゴーン！！！！」

戒『残念だが、俺には効かな…。うお？』

戒はライダーの露出させた瞳を見ても自身の持つ対魔力でほぼ意味が無い事を証明する。しかし、ライダーが魔力を放出させた事によりランサーとセイバーを呼び寄せる結果となり、戒は少しだが後退せざるしかなかった。

ランサー「ちっ！外したか…。しかし、ライダーが先に見つけてたかよ。」

セイバー「貴方はまだそれを言っていたのですか…。」

戒『やれやれ お前達は言い争いをする為に集まったのか』

セイバー「違うに決まっています?」

戒『なら、そろそろ再開でしょうか…。』

ライダー「2人共気を付けて下さい。戒の持つあの鎌はどういう訳か周りの障害物をすり抜けて来ます。速さもかなりの物で音速に近い速度で振るわれます。」

ランサー「その仕掛けのタネあの鎌にあるって所だろ?アレからは何かはわからねえが高位の存在の様な物を感じるぜ?」

セイバー「高位の存在…ですか?」

戒『正解だ。流石は魔術にも学があるクー・フリーンと言う所だろうな…?コイツは別世界に存在する精霊を武器化した物でな?闇の精霊の一体で名はでシャドウと言う。』

ランサー「闇…か。なら、実体をすり抜ける芸当も領けるな…。しかしよお?んな簡単に教えて良い物なのか?」

戒『タネが判った所でそう簡単に攻略出来る物では無いからな…。』

戒はそう言ってランサーに向けて鎌を振るう。

”ギィン!!!!!!”

ランサー「はっ!マジですり抜けて来やがるな」



戒の振るった鎌をランサーは笑いながら防いだ。そこに……

セイバー「ランサー、加勢します!」

ライダー「1人では手に余ります!連携して倒しましょう。」

戒「3人同時…?良いだろう。少しは本気を出すか。〔魔法の射手連弾闇の100矢〕!」

ランサー「本気とか言って、その程度か!」

ランサーは避けずに槍で弾きながら、叫ぶ。

セイバー「わたし達がいる事を忘れてもらってはこまります!」

ライダー「その通りです!」

戒がランサーを相手にして魔法を撃った時に背後からはライダーが真横からはセイバーが斬り掛かってくる。

戒「忘れてなどいないわ!!不意を突くのならば最後まで気配を断て!」

ライダー「そんなっ!」

セイバー「なっ!」

戒は背後から襲って来たライダーの腕を難なく掴み取り、セイバーに向けて投げた。2人はまさか投げて来るとは思わず間抜けな声を上げて仲良く倒れてしまった。

戒『2人には悪いが退場していて貰おうか…来たれ、虚空の雷、薙ぎ払え「雷の斧」!!』

戒が倒れた2人に雷撃魔法を放つ、そして……

2人「「キュー」」

戒の雷撃を喰らい、2人は外傷は無いが目を回して気絶していた。

戒『2人はもう少しやると思ったのだが……。まあ、対魔力が高くとも暫くは動けないだろうな……。』

ランサー「ちと厳しいじゃねえのか？お前さんのあの動きは誰から見ても驚くぜ？背後にいる奴の腕を見もしないで掴んで真横にいる方に向けてぶん投げるなんて事はよ。最後のアレも苛めみたいな物だぜ？」

戒『最後はランサー…お前か。』

ランサー「はっ！鎌で俺の槍を受け切れるかな!!」

ランサーはそう言つて朱槍を用いた薙ぐ、打ち付け、槍のリーチを活かした蹴り等の連撃を浴びせる。が戒はそれを鎌の柄の方で全て受け流した。

ランサー「やるじゃねえか!…ならばこれでどうだ!!!」

ランサーは再び槍の攻撃をするが、今度は尻ぐ等の線の攻撃では無

く、自慢の神速を活かした突きを無数に放つ。

戒『おお！？やはり速いな！』

ランサー「そう言うなら大人しく食らえよ！」

戒『それは断る！環刃乱絶爪！！』

戒はランサーの乱れ突きの全てを石突きの部分で受け止め、弾いた勢いを殺さずに刃を地面に突き刺し、魔界から魔獣の爪を召喚し、ランサーへとソレを放った。

ランサー「ちい！」

それをランサーは舌打ちをしながら戒の技を自慢の槍で弾く。

戒『そう簡単にとらせてはくれぬか……。』

ランサー「当たり前だろ？簡単にやられてちゃ英雄なんて言われねえよ。」

戒『なら少しスタイルを変えるか…「氷華絶掌」セルシウス！！』

戒はシャドウを破棄し、両腕と両足に凍気を纏う。

ランサー「…無手か？剣道三倍段を知らない訳じゃねえよな？」

戒『知っているさ。だが、俺にはその常識は通用せぬよ！！！！』

戒は瞬動を使い、ランサーに近づき上段蹴りを放つが寸での所でしやがみこんで躲し、足払いから連携してリーチを活かした突きを放

つが最初の足払いを跳躍して躲し、突きを虚空瞬動を使い、回避しながら距離を離す。

ランサー「俺と同じ位に速いな…。」

戒『クー・フリーンと同じ位とは光栄の極みだな…。』

話をしながらも両者は休み無く攻撃を繰り返していた。ランサーが突きを放てば戒は腕で軌道を変え掌底を放ち、戒が蹴りを繰り返せばランサーも蹴りで対応しその直後に跳躍し薙払う。

戒『時間も無いしそろそろ終いにするか…。』

ランサー「そうだな…。お互いに次の一撃に全てを賭けようか…死ぬなよ？」

そう言つてランサーは両の手に持った槍に禍々しい魔力を込める。

戒『不死の俺にそれで死ねと言う事自体難しいと思うのだが…？』

戒は腰を落として右手に氣を練り込みその密度を高める。そして、両者は同時に動いた…。

ランサー「〔刺し穿つ…死棘の槍〕ゲイ……ボルグ!!!!!!」

戒『凍牙爆碎撃!!!!!!』

初動の踏み込みの速度が速かったのか、戒の攻撃が先に決まり、ランサーの身体は酷い凍傷に掛かった様になっていた、しかし、刺し穿つ死棘の槍の心臓を穿つという結果を確実に残す因果の呪いで戒

の胸にはゲイ・ボルグが刺さっていた。他人から見ればランサーの勝ちと思われた。

戒『引き分け…か。』

ランサー「だな…。しかし、我が宝具たるゲイ・ボルグを受けて生きている事に俺は驚愕だな…。」

戒『君達の世界の真祖とは若干だが定義が違うのだが、心臓を貫かれた位では死なないよ。…と言うか重傷なのはランサーでは無いのか？先程の技で重度の凍傷の一手手前まで来てる訳だから…？』

ランサー「確かにそうだな…。」

戒『俺の過去は今度にして今は休もうか？最初の模擬にしては少しやりすぎたしな』

そう言つて戒はフィールドを元の何もない部屋に戻して、未だに気絶しているセイバーを小脇に抱え、ライダーを肩に担ぎ上げて、凍傷で動きづらいランサーを風で浮かし移動する。

## 第六話（後書き）

ご感想をお願いします。

## 第七話（前書き）

今回もシリアスに仕上げた積もりですが何か喋り方が違うと思う方や質問のある方はメッセージ若しくは感想板にてお願いします。

## 第七話

ランサー達とルイズ達と上のコテージに戻った戒は……

戒『さて、セイバーとライダーも動ける様になった事ですから今日はこのまま解散とします。良いですねマスター？』

ルイズ「しょうがないわね。アンタの過去はまた今度の機会にでも聞かせてもらっわ。」

キュルケ「そうね。ダーリンの強さが凄いのが判っただけでも収穫はあつたからね。」

タバサ「……今度戦い方を教えて。」

戒『出来る範囲内なら構わないですよ。』

キュルケ「狡いわよタバサ！ねえ、ダーリンわたしも良いかしら？」

ルイズ「だ、駄目よ！？」

キュルケ「あら？なんでヴァリエールが間に入ってくるのかしら？」

ルイズ「わたしがコイツのご主人様だからに決まってるじゃない！  
！」

タバサの言葉に戒は了承するとキュルケが便乗するがルイズはそれを阻み2人は口論をしていた。それを余所に戒はランサー達と話を



していた。

戒『ランサー、マスター・ルイズを頼む。』

ランサー「お前はとうするんだ？」

戒『なに、少しばかり用事があるからな…。』

ライダー「用事…ですか？」

戒『ああ。人数も増えた事だし、部屋の確保はコテージで間に合っているが人を匿ったりした時用と考えているが…ランサー達を召喚する前に決闘紛いの事で此処の責任者と話が有るものでな？』

セイバー「上の者と…ですか？ならばわたしも御一緒します。召喚者たる貴方の護衛で行きますので。拒否権はありませんよ？ルイズにはランサーとライダーがいますから問題はありません。」

戒『うーん。まあ、交渉するから取り敢えず連れて行った方が説明も出来る…か？判った。セイバーは一緒に来てくれ。ライダーとランサー霊体化してルイズと一緒に授業に出てくれ。』

ランサー「習い事に出ろって？詰まらねえな…。」

ライダー「わたしは構いません。」

戒の言葉に2人は…ランサーは渋るがライダーは快諾してくれた。

戒『助かるよ。…ああ、そうだ。ライダー少し良いか？』

ライダー「何か？」

戒『確か、君は聖杯を得た時の望みは確かその魔眼を封じ込める事だったか？』

ライダー「はい。正確には消すですが…。」

戒『消す必要は無いぞ？』

ライダー「どう言う事ですか？」

戒『ランサーやライダーは魔術が使えるよな？』

ライダー「はい。ですがそれと魔眼を消さないのと何が関係しているのですか？」

戒『俺は兎も角として、ライダーやランサー…魔術を使える者は魔術回路と言う物があるよな？それを応用すれば魔眼のON、OFFの切り替えが出来るかも知れないと思ったんだよ。』

ライダー「出来るのですか!？」

戒『俺は少し手伝っただけだよ?…少し失礼するぞ?』

そして戒はライダーの頭に手を置き目を閉じて集中し、ライダーの魔術回路とは別に魔眼の制御をする為の回路を作成する。

戒『……これでどうだ?ライダー、少し確認してくれるか?』

ライダー「はい………凄い!確かにわたしの魔眼の力の切り替えが出

来る様になっています。」

戒『そうかそれは良かった。これで目隠しは要らなくなったな?』

ライダー「戒：貴方には感謝をしても仕切れません。わたしはこの魔眼が疎ましく感じていましたが、戒の御陰で魔眼の制御が出来る様になりとても嬉しいです。」

戒『俺はそんなに大それた事はして無いよ。ただライダーの魔術回路があつたからそれを参考にしただけに過ぎないからな…?』

ライダー「それでも…ですよ。」

戒『なら、素直に受け取って置くよ。』

ランサー「ライダーの願いは叶えて俺達の願いは叶えてくれねえのか?」

戒『確かランサーの場合は互いの誇りを賭けた戦いが出来る事だろう?それなら、大分先になるが確実に出来るから待っていてくれ。セイバーの願いは叶えてやる事は出来ない…。』

セイバー「何故ですか!?」

戒『過去の出来事はどうする事も出来ない…ただそれだけだ。』

セイバー「……貴方は本当に何でも知っているのですね。」

戒『なら、言い方を変えよう。セイバー、君は何故に王になろうと決意した?』

セイバー「それは……………」

戒『平和にする為に……………だろ？なら逆にセイバー……………いやアルトリア以外の王では国は存続は出来なかった筈だよ？アルトリアは自分は間違った王だと思っている様だがそれは違う。お前の行って来た事は後世には名君として語り継がれ、今も昔と変わらずに君は皆の中で英雄として違わぬ物だ。だから、間違っていたと思わないでくれ。』

セイバー「貴方にわたしの何が判ると言うのですか！！」

戒『判るよ……………俺だって前の世界では英雄に近い扱いをされた事もあるし、失敗をすれば自分は間違っていたんじゃないのか？ってな？だけどな、それは違った。』

セイバー「何が違うと言うのですか！！わたしは自分のした過ちを清算したいと思って何が悪いのですか！？」

戒『本当にそれは過ちだったのか？いや、過ち』

セイバー「それはどういう意味ですか？わたしのやった事は過ちでは無いと言つのですか！？」

ルイズ「ちょ、ちょっとどうしたのよ！？」

ランサー「嬢ちゃんちょっと黙ってな？」

ルイズ「なんでよ！明らかに言い争ってるんだから止めるべきでしょ！？？」

ライダー「それは違いますよ、ルイズ。戒はセイバーの願いは叶えられないと言っているだけです。」

ルイズ「願い事？それは一体何なのよ？」

ライダー「それは本人から聞くべき事です。わたしから話せても当事者の話を聞くのでは語弊が有りますから。」

ルイズ「そう…ね。判ったわ。じゃあアイツに任せてわたし達は授業に出るわよ？」

ランサー「退屈だが行かねえとだな…。」

ライダー「ランサー、習い事は基本的に受けなければいけないのですからそういう事は言わないで下さい。」

ランサー「わあってるよ？じゃあ、嬢ちゃん達はライダーも一緒に行くんだから俺は霊体化して見学させて貰うわ…。」

そうしてランサーはその場から消え、ルイズ達はライダーと一緒に学院に戻って行った。そして、戒達はその場でまだ話をしている。

戒「……そうだ。アルトリアがそうだと言っても俺は違うと思う…。」

『

セイバー「では自国を守る為に村一つ焼き落としたとしてもですか！？他の方法もあった筈なのに……」

戒「だが、それ以外思い付かなかったのだろ？それにお前がそれを否定しやり直したとして、それ迄お前に付き従った臣下共を否定すると言うのか？」



戒『それは絶対無いからな!?!』

セイバー「????ど、どうしたのですか?」

戒『い、いや、不穏な物を感じた物でな?』

セイバー「は、はあ?」

戒『んん!取り敢えず、当初の予定通りに此処の学院長に会って交渉するでしょう。セイバー、改めてになるがこれから宜しく頼む。まあ、令呪がある時点で変な気もするがな...。』

セイバー「はい!此方こそ改めて言います。ここに契約は完了した。我が剣は貴方と共に、貴方の運命はわたしと共にある。マスター、指示を...。」

戒『じゃ、今は学院長の所に行くから一緒に行こうかアルトリア。』

セイバー「はい!」

そして、戒はセイバーと一緒に学院の中にある学院長室に向かって行く。

## 第七話（後書き）

オマケ

戒『そう言えばアルトリアは鎧の他には何も無いのか?』

セイバー「?はい。わたしは戦士ですからこの身に纏うのは鎧だけですわね。」

戒『ちよつと待つてろよ?え〜と、あつたあつた。【着せ替えカメラ】〜!これに衛宮家で着てた服の写真をいれてつと。セイバー、そこから動いたら駄目だぞ?』

セイバー「は、はい。」

”カシャツ!!”

セイバー「こ、これは?」

カメラに撮られた瞬間にセイバーの姿は鎧姿ではなく、白のワンピースのような長袖の様なシャツに青のロングスカートとFate/stay nightの衛宮邸で着ていた私服姿に変わっていた。

戒『何時までも鎧姿だと味気ないからな?それに私服姿も似合っているぞ?』

セイバー「そ、そうですか/////////」

戒『それじゃ、行こうか?』



## 後書き

作者「出来たぁー！！！！！！」

戒『一体なんだコレは！』

作者「最後の事か？」

戒『セイバーを加入させたのも最後のアレを言わせただけだったんじゃないだろうな？』

作者「ソ、ソナコトナイヨ？セイバーはその生き方や在り方も好きだし、あの台詞も痺れる物があったからな…」

戒『はぁ、もう良いわ』

作者「では、次回の話では学院長とのお話ですが、若干のキャラ崩壊が見受けられるかも知れませんがご了承下さい。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0842p/>

---

少年の異世界戦記 ～ゼロの使い魔編～

2011年5月13日00時11分発行